
真理と俺。

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真理と俺。

【Nコード】

N0981Z

【作者名】

KOF

【あらすじ】

自称普通の高校二年生、本多識織。彼が現在在住している東京都、と日本各地では自殺が多発していた。そんな中、識織少年は、向こう隣りのアパートに住む美人ねーちゃんの自殺を目撃してしまい――。超能力や魔術といったものが、ひそかに跋扈する世界に、一人の少年が巻き込まれる小説。 ナイフ戦闘に憧れての、異能バトル系モダンファンタジーです。

プロローグ

「ねえ、神様って、いるの？」

少しだけ昔、一人の少女が父親に問うた。

それは、どれだけの人間が疑問に思ったことが。その少女もまた、その多くの人間の一人だった。

しかし、父親は、何も躊躇わずに答えたのだった。

「いるさ。お父さんは、信じているから」

信じるところに、神はあらわれるんだよ。

少女の頭を撫でながら、父親は微笑んだ。

少女は、蒼白なその顔を、父親に向けて、彼と同じように微笑みながら、また、問うた。

「じゃあ、わたしのところにも、信じれば、神様はやってくるかなあ？」

やってきて、お願い事、叶えて欲しいなあ、と。笑いながら、顔を伏せた。

それは、不遜すぎる願いなのかもしれない。叶えて欲しいと思うことさえ、不遜なのかもしれない。それ以前に、叶う可能性など、零なのかもしれない。

それでも、願わずには、いれなかった。

「お父さん。神様は、わたしのこと、嫌いなのかな」

「……………」

白いベッドの上で、静かに涙を零しながら、無力な父に、そう語った。白い髪も、その涙で濡らしながら、触れれば折れてしまいそうな喉をしゃくりあげながら。

「お父さん、お父さん。わたしは、どうして、」

「神様がお前を嫌いになっても」

私は、お前のことを嫌いになったりしない。

私が、神になってやる。

父も、同じく涙を黒い瞳から零しながら、彼女の手を握った。

この二人には眩し過ぎるほどの日の光が差し込む白い部屋で、二人はお互い泣きあった。どちらが、どちらにというわけでもなく、どちらもが、どちらにも、泣いた。

「天の坐」

その、眩し過ぎるほどの部屋に、黒い点がぽつり。

そこからのなかもしれない。

無力な男が、狂い始めたのは。

プロローグ（後書き）

この作品は、作者の偏見によって満ち満ちています。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一話：自殺予兆

二十一世紀もようやく世紀末を迎え、二十二世紀への期待が膨らむ中。様々な技術が発展し、様々なことが可能になった時代。

それでも、人が住む場所が一新されるわけでもなく、二十世紀から存在するアパートメント住宅。多機能化が図られたとはいっても、所詮はアパート。高級マンションなどと比べるとセキュリティ面でも圧倒的に負け、外面でも完璧に負けた存在だが、安価な家賃は学生が住むにはちょうどいいのだった。

その、都内某所のアパートの一室。

「自殺者が全国で急増、ねえ」

黒髪黒目の平凡な容姿をした少年、ほんだしきあり本多識織。登校直前なのか、リビング兼寝室で食パンをかじりながら、テレビ画面に映る、今話題のニュースを眺めていた。

「俺なら出来ないがね。そんな恐ろしいこと」

そう言う。バターナイフでバターを掬い取りパンに塗りつけ一口。塗り過ぎたのか、濃厚なバターの味が口いっぱいに広がる。隅に置いてあったオレンジジュースで口直しをすると、もう一度テレビに視線を移した。

そこには、自殺者の遺書が映し出されていた。それも、生々しい錆色の染みがある、それらしい封筒に入った。

その文面は短く、端的な言葉しか述べられておらず、一般人が見ればサイコパスな文書にしか見えない。むしろ、書いた本人以外は何を言わんとしていたのか分からない。

ただ一文、こう書かれているだけなのだから。

『奴が来る』

震えた文字。飛び散った錆色の血液の痕。死亡方法は恐らく、^{ストカット}手首切断。文書に飛び散った染みの模様は乱雑で、『刃物』ではないことは明らかだった。文書を書いた直後に筆記用具で掻き切ったのだろうか？

「……………自殺か。味気ない、死に方だな」

そう言うときささと残りの食パンを口に放り込み、オレンジジュースで流し込むと、横に置いてあったカバンを持って玄関へと駆けて行った。

「いつてきます」

と、誰に言うでもなく、アパートの中へと語りかけた。もちろん、誰からの返事もあるわけもなく、ただただ声が空しく響いただけだった。

靴を履き、玄関を開けると、そこには黒髪ポニーテールの可愛い幼馴染の姿が——あるわけもなく、新学年早々の冷たい外気が体を引き締めた。

眼下には広大な光景が——広がっているわけもなく、アパートの三階、見渡せるのは、向かいの棟の美人ねーちゃんの下着ぐらいである。

いつも通りの光景。いつも通り際どい下着が風に揺れている中、一つだけ、異常な空間があった。

向かいの美人ねーちゃんが、ベランダの取っ手の部分に足をかけていた。ただ、尋常ではない様子で、何かに追われているような。

そして、目が合った。口が開く。か細い声で聞こえなかったが、口の動きで何を言わんとしているのかだけは分かった。

『た、たすけっ！？』

分かったが、言い終わる前に彼女は何もない虚空へと体を投げた。

識織が知るところの彼女は、夜に出勤するどこにでもありふれたただの風俗嬢だったはずだ。もちろん、基礎体力も『一般』の域を出ない彼女は、絶対に助走なしで、否、もしあったとしても、識織が住む第一棟と彼女が住む第二棟の間は飛べない。

そして、超能力者でも魔術師でもない彼女を待ち受けるのは、

——重力と言う名の、当たり前前の力である。

次の瞬間、彼女は一瞬の浮遊感を味わった後、落下が始まり、獣のような声を上げてアスファルトで出来ている駐車場へと落ちて行った。

そして、不意に、人外染みた声が止んだ。近くにいれば、おそらくは聞こえたであろう果実を潰すような音は、遠く離れた識織の耳には届かなかった。

ただ、ゆっくりと向かいの駐車場を見下ろすと、そこには、真っ赤で粘着質の液体が、美人ねーちゃんを中心に不気味な魔法陣のような模様を形作っていた。

識織はその光景を何も言わずに見つめ、彼女が飛び降りてきた部屋の方に視線を向ける。

そこで、なにか紅い瞳を持った何かの存在を感じた。それは、識織に見られていると分かるや否や、一瞬でその気配を霧散させ、気配の海である街の方へと消えて行った。

何が起こっているか、あまり分かっていない識織だったが、ここは社会人になるための試練だと思い、通学鞆の中からスマートフォンを取り出し、警察を呼んだ。

「もしもし？ 警察ですか？ たった今、飛び降り自殺をした女の人がいるんですけど」

第二話：異能

東京都某所。明蘭学園高等部。全国でも有数の名門私立学校で、学力もさることながら、運動も全国トップレベル。さながら文武両道を体現している、超の上に超を超倍したぐらいの超エリートが通う学校、のはずだ。

そこで疑問が湧き立つのだが、そこに超平凡である本多少年はこの学校に通っていい存在なのか？

——いいのである。

「おい、本多。本多きゅーん、聞こえてますかー？」

そんな超エリート学校の普通の教室で、自称普通男子、本多識織は自分の机に自前の枕を装備させて昼寝を敢行中。クラスメイトの善意ある挨拶を完璧に無視。

いびきを立てずに礼儀よくご就寝中であるのに対し、クラスメイトAは構わず話しかける。

「今日、新学年新学期早々遅れてやってくるとはどういう御了見でございませうか？」

そうなのだ。その後、警察から事情聴取やらなんやらを無駄に長い時間かけて聞かれたわけだ。それもそうだろう。通報した最初の

言葉が、『飛び降り自殺』なのだから。

「……おい。ぼこるぞハゲ。さっさと起きねえと、全部剃っちまうぞ」

「うつせえな！！ こつちゃあ朝から事情聴取やらをされてとてつもなく不機嫌なんです！ あの税金泥棒どもが！ 最近の連続自殺事件で目立ってるからって調子こいてんじゃねえぞ！！」

むぎゃー！ と叫びながら天井に向かって怒りをぶつける。クラスメイト全員の視線が集まるが、それを気にせず自前の低反発昼寝用枕にぎちぎちと噛みつく。

周りのクラスメイト達はその発生源が組織だと知ると、「またお前か」と口々に言って各々語らいに耽りだす。

「なに？ お前、また面倒事にエンカウントしたのか？」

クラスメイトA（男子）は、未だに荒れている組織を無視して話題だけを抽出する。まるでスポットの如く、それ以外のものはゴミとでも言わんばかりに、組織の心を無視した。所謂、意趣返しである。

「ん、ああ……向かいの美人ねーちゃんが飛び降り自殺したのを目撃しちゃった」

「へえん。大変なんだな、お前も」

「俺は、このことを聞いてそれだけで終わらせるお前は凄いと思うよ」

話が膨らまねーな、ともう一度低反発枕に顔を埋める識織。

それをクラスメイトAは、「人の不幸で話し膨らませて、面白くねーべ？」と至極まっとうな返答をしてくださった。それはそれでメディアの在り方を全面否定しているような気もするが、まあ、そんなものなのだろう。

「そんで？ お前は大丈夫なのかよ、生の死体を見て」

「……ん、そうだな、」

人の死体を見て、人の死に直面して、動揺しなかったのかと。それを見て、お前は『大丈夫』なのかと。平静を保っているように見えるが、本当はそんなこと無いんじゃないのかと。

「死体ぐらい、なんてことはないさ」

今までよく見てきたからな、と。

低反発枕に顎を当てて、黒板の方をぼーっと見つめながら、何の気なしに、当たり前のように、平然とそう言った。

それに対してクラスメイトAも、「そうか」と答えるだけで。

これ以上、この話は膨らませないほうがいいと判断してのことだろうか。もちろん、識織の冗談という可能性も高いし、現実味の無い話しだ。

だからこそ、ではないだろうか。

「まあ、お前が大丈夫って言うんなら、大丈夫なんだろう？」

「まあ、俺が大丈夫って言うんだから、大丈夫なんだよ」

そこで新学年最初のホームルームを告げるチャイムが学校全体に

響き渡り、がやがやと生徒たちが各々の席について行く。クラスメイトAも例外ではなく、「じゃあな」と告げると右端の一番先頭の机に向かった。ちなみに、識織の席は左側の窓際、運動場がよく見える一番後ろの机である。

と、ちょうど一年生からの担任、孰川いすかわるるが高性能な身体を見せびらかしながら教室に入ってきた。大和撫子然とした長い黒髪を歩きたびに揺らしながら、その艶めかし胸やら何やらをばわんばわんと。

それと同時に学級委員が、「起立」と堅苦しい掛け声を。識織も仕方がなく低反発枕から顔を引き剥がす。

「礼」

「おねがいします」

「着席」

とまあ、普通だ。

「おはよう、みんな。二年生になってもこのクラスを持てるなんて、嬉しいわ」

とまあ、普通の挨拶をしている孰川を興味なさ気に頬杖を突きながら眺める。相変わらず、男子高校生を挑発していると思えないプロポーションをしている。男子からは欲望に塗れた視線が、女子からは憧れと嫉妬の視線が。

そんな普通以上異常未満の担任は、普通の挨拶をしながら、とあることに触れてきた。

「とまあ、ここまでは前置きだったんだけど、本多くん？ キミ
キミ、いつになったらその面倒事エンカウント率下がるのかなー？」

「せんせー、それは禁句だと思いまーす」

あはははは、と教室から笑い声上がる。識織は、やれやれと言
った様子で運動場に視線を移した。

「本多くん、無視はいけないわよ無視は」

まだからかってくるつもりかこのオバハン、と心の中で悪態をつ
くと、識織はがらっと立ち上がって、「先生」と神妙な声で話しか
けてみた。

静まり返る教室の中、るるるは、「どうぞ、本多くん」と相変わ
らず悪戯っぽく笑うだけだった。

「俺のエンカウント率なんかより、先生の露出度を減らした方がい
いと思います。どこぞの写真部やらが盗撮しているとも限りません
ので」

「本多アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！
」

「あら、そうなの？ 写真部副部長、浦島くん？」

「はっ！？」

ここまで簡単に釣れてくれるとは思わなかったが、どちらにせよ
話題は自分から逸れたようなので、識織は悪魔のような笑みを浮か
べながら低反発枕が待つ机へと顔をダイブさせた。

なにごとも、頭を使えば大体の危機は回避できるようだ。また一つ、教訓を教えてもらったことに感謝しながら、尊き犠牲になった浦島くんに向けて、合掌。

放課後。健全な高校生の諸氏であれば、八割方は部活動に精を出しているところだろう。しかし、識織は部活もせずに、とある一室に呼び出されていた。

その一室とは、——漫画や小説染みた、学校の生徒の中で最高権力を保有する、生徒会室。室内はオレンジ色の夕日が差し込んで、中央にある会議机を幻想的に照らしていた。

そこで、生徒会長である女性と対談中。

「識織くんは、自殺ってどういうことだと思う？」

窓から差し込む夕日に焦げ茶色の肩まで伸ばした髪を煌めかせながら、優雅にそんなことを聞いてくる。

「源先輩。その前になんで俺を呼び出したのか聞いていいですか？」

識織のそんな問いに対して、源先輩——源終夢^{みなもゆいむ}は、くだらなさそうにこう答えた。

「先生方から、あなたが最近流行りの自殺の目撃者になったからよ。じゃなかったら、平凡なあなたとなんか話さえないわよ」

少しだけ心に傷がつく識織。相手が女性なうえに美人なわけだから、ダメージは野郎に言われるより次元が違うレベルで痛いのだ。そんな痛みを識織は覚えながら、彼女の問いについて考えようとしたが、アホらしくなってやめた。

「自殺ってのは、自分で自分を殺すから自殺って言うんじゃないですか？ それ以上でも、それ以下でもないんじゃない？」

「もし」

彼女は、識織の答えに対し、まったく物怖じした様子も無く、こう答える。

「もし、死んだその子たちが、誰かに脅されたり、苛められたり、蔑まれたり、差別されたり、追い詰められたりしていても、かしら？」

自殺とは、自分で自分を殺すことだ。これは変わらない。そこにどんな心境があったとしても、自殺とはそういうことだ。そこに誰か他人の手が加わった状態のことを他殺という。

しかし、終夢が言ったのは、どうなのだろうか？

「それは――、」

「社会的には何の制裁も加えられないけど、そうしたことを行つた人間というのは、自殺を促したということと同様よね？ それはつまり、他殺、ということにはならないかしら。そうね、間接的他殺、

とも呼んでおこうかしら」

間接的他殺。直接的他殺とは打って変わって、あまり騒がれない。それは、自殺という大きな隠れ蓑に隠れているからだろ。誰かが自殺者を脅しているようが、苛められているようが、蔑まれているようが、差別されているようが、追い詰められているようが、最終的に死ぬのは、自分である。

「つまり、実体の無い殺人というわけよ。そういう、間接的他殺というのは」

「けど、やっぱり、直接的他殺、——殺人の方が、恐ろしくないですか？」

瞬間。彼女の華奢で細い右腕が物理的にぶれるのを感じた。
刹那。両目に突きつけられた人差し指と中指に恐怖を覚えながらも、その右手首をなんとか掴みとった。

「へえ、よく、止めたわね」

「生憎ながら、『眼』がいいんでね」

そう言つと、終夢の手首をぱつと離れた。すると、そそくさと後ろに下がっていった。驚くことに、その距離三メートルである。通常の人間が初速度ゼロから一気にあそこまで加速するのは不可能だ。

「それ、何かの『異能』？」

「さあて、どうなんでしょうね。……はは、っていうか、センパイ、『異能』ってなんですかー？」

識織がそう言うと、終夢は面白くなさそうに、「ふーん」と息をつくと、意地の悪い笑みを浮かべるのもやめてしまった。

識織は、彼女のどこに琴線が隠れているのか恐れて、この話を膨らませないようにしたかった。

「そうやって線引きしているのもいいんだけどね？ 最近の連続自殺事件、あれ、どう考えても『異能』によるモノでしょう？ 私、そういう陰湿なの嫌いなものよ」

「先輩。後輩イビリは陰湿じゃな」

ヒュバツ！ と彼女の体が消えたかと思うと、次は膝蹴りを放ってきた。まさか、ここまで本格的な攻撃を仕掛けてくるとは思っていなかった識織は、その圧倒的質量による膝蹴りを、為すすべなく額に喰らった。

正直なことを言うと、そのスカートの中にある黒い下着に目を奪われていたのだが。

面白いように後ろに吹っ飛んだ識織を、彼女は、「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。

「痛いですよ、先輩」

視界がちかちかしているのを感じながら、無意味だと分かっている反論をせすに入れなかった識織。

「隠し事は『面白くない』わ、識織くん。知っているなら知っているで、ちゃんと語らえることだってあるのだし」

高校生にしては豊かな胸の前（青系のブレザーを押し上げている）で腕を組みながら、額を押さえる識織を見下してそう言う。

識織は若干揺れる視界にぐらつきながら、よろよろと立ち上がると終夢に視線を向けた。

その焦げ茶色の瞳は、こう語っていた。

『真実を吐け』

識織は少しだけ迷ってから、意を決したように彼女を見つめる。

「『真理の明眼』っていうんですよ。俺の両眼。言えるのは、それだけです」

先程潰されそうになった眼に手をやりながら、自重気味に笑う識織。

それが、彼の異能の名なのだろう。

「ふうん。『異眼』系統ね、珍しいじゃない。能力は？」

「知ってるでしょう？　そういうのは、あんまり教えると自分の命にかかわるんですよ。俺、これでも自分の命は大切だと思っている人間ですから」

異能。それは超能力とも呼ばれる代物である。

もちろん、大々的に公おおやけになっていているわけではないが、知っている者は知っている。知る人ぞ知るを、さらにミステリシリアス化したようなものだろう。

その多くは普通と変わらない生活は、送れない。精神が、もたないのだ。

だからこそ、こういった一般人である超能力者同士がこうして普

通に顔を突き合わせるのは珍しい。

「へえん。だったら、私のも教えておいてあげるわ。名前だけ、ね」

『波動』。そう呟くと、ふらふらと立ちつくす識織を置いて、どこかに去ってしまった。後ろ姿で手を振って来た。カッコよかったのが癪だったので、振り返さなかった識織。

生徒会長、源終夢。

根城である生徒会室から彼女が去ると、部屋全体に張り詰めていた緊張のようなものがぶつりと切れた。

「——なんだよ。あの速さ、素面すめんですかい」

そう悪態をつくとき、識織も彼女を見習うようにしてその場を去った。

そして、去り際にこんなことを思った。

人を殺したことがない奴なんて、いるのだろうか？

第二話：異能（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三話：『真理の明眼』

バイト。一人暮らしである本多少年にとっては奨学金よりも大事な収入源である。

コンビニの店員だが。

そんな生命線であるバイトに五分遅刻してしまった。普段は真面目な組織は、こう言うことに結構うるさい。これでクビにされたらどうしよう、などと本気で悩んでいたのだが、店長が寛容な人間なようで、「大丈夫だよ」の一言でホッと胸を撫で下ろした。

それもこれも、あのバケモノ生徒会長の所為である。

俺の心労に要した精神力を返せ、と口の中で呟いていると、お客に不気味がられたようだ。

学校が終わるのは午後三時三十五分。バイト開始は四時半。そこから九時まで働く。

時給は九百円。お高め。

こんな優良物件おつとめ物件。簡単に諦められるはずがない。

そんなこんなで、今日も本多少年は快適空間コンfortで精をだしている。

バイトが終わり、夜も更け切った初春。適当に先輩や店長に挨拶をして、彼はコンビニを後にした。首には彼女からもらった手編みマフラー——なんかが巻かれているわけも無く、そんな存在も無く、微塵も無く、黒いネックウオーマーが着けられている。

「今日は、金曜だったか。なら、明日は行けるかな？」

コンビニの入口の前で月が浮かぶ空を眺めながら、どことなく嬉しそうに笑う。

そんな彼が向かうのは、自宅、というわけではなく、コンビニ近くの大型量販店、チープマーケット。とにかく、安いことで有名なスーパーマーケットだ。

移動方法は、もっぱらバイクである。学校への通学方法もバイクである。というより、どこに行くのもバイクである。まあ、バイクという名の原付なのだが。

ヘルメットをかぶり、エンジンを付け、いざ出発。

初春の頬を撫でる風はまだまだ寒く、ネックアーマーを装備していなければ頬が真っ赤になっていたであろう。

「さみーな、やっぱり。今日は暖かいモン食いたいな〜」

そう言いながら原チャリを飛ばす。それでも、まあ、法定速度は超えないが。

そうは言っても、ギリギリのところまでは出すので、かなりの速度となっていた。

このままどこかに、何かに追突すれば、自分もあっさりと死ねるほどには、十分な速度に達していたのだった。

死。そのキーワードは、ここまで近くに存在している。

日々、人間は、自分は死なないと思っ生きてる。いや、それは非日常であつたとしても、簡単に自分が死ぬというイメージは湧かない。

だから、死なない。

死というイメージを出来ない生物は、死なない。死ねない。

しかし、だ。

死、というイメージをしてしまった生物は、自分の死を想像できてしまった生物は、容易くその身を散らす。

自殺、もそういうことなのだろう。

自分が、自分に殺されるというイメージを、自分でしてしまった瞬間から、もう、『死』へと突き進んでしまう。

そう。

こんな風に、目の前に飛び出してくる少女のように。

「ッ!？」

その少女もまた、向かいの棟の美人の女性のように、何かから逃げるように車道へと飛び出してきた。

識織は暗がりから突然飛び出してきた少女の金髪を見た瞬間にハンドルを思いつきり左へと切った。車体は大きく横に傾いで、そのままアスファルトの上を大きく滑っていく。

刻一刻とバイクがアスファルトの上を滑り、少女の元へと突き進んでいく。

――仕方がないな。

バイクが彼女にぶつかる瞬間、その薄皮一枚を隔てて、圧倒的硬度の何かにぶつかったかのように、クラッシュ音を上げてびたりと止まった。

「ぐう！？　くそ、大丈夫か！！」

身体のとどころを擦り切り打撲したのか、よろよると立ち上がる。夕方を想起させるのだが、気の所為だと思い、左右へ揺れながら金髪の少女の元へ駆けよった。

「た、たず、けて！！」

そう言いながら識織の身体にしがみついてくる金髪の少女。今度は朝のことを想起させてくる。朝、あの美人ねーちゃんが飛び移ることに成功していたなら、きっとこうなっていたのだろう。

「お、落ち着いて。どうしたの、いきなり飛び出してきて」

「や、奴が、奴が来るの！？　食べ、られちゃうの！！」

何を言っているのか、さっぱりだ。いや、相手はこちらに伝える気が無いのだから分からなくて当然か。彼女はただ錯乱したように喚んでいるだけなのだから。

「食べられるって、何に？」

未だ暴れる彼女の体を大きく揺さぶり、自分の眼を見させる。そ

うは言っても、今の自分の『眼』は、見ていて楽しいものではないだろうが。

しかし彼女は『眼』のことなどどうでもいいらしく、その『眼』をしっかりと見ていた。

「や、奴は、奴は!!」

ひたり、と。

彼女が飛び出してきた暗がりから、何かの音が聞こえた。しかし、それは物理的な音ではない。頭の中にだけしか響かないような、そんな音だ。

いや、音と表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違っているというべきか。

住んでいる世界が違う。起源すら違う。根本からして違う。

「バケモノなの!!」

ひたり、と。

彼女が飛び出してきた暗がりから、何かが出てきた。しかし、それは物理的なモノではない。見える人にしか、見せる人にしか見えないような、そんなモノだ。

いや、モノと表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違っているというべきか。

「化け、物？」

黒い体躯の四足獣、といっても良いのだろうか？

狼のようなその骨格は、しかし歴史上の生物としては、その巨大さは異常である。

三メートルを超すその巨体でありながら、無駄と断言していい所がまったくないそのしなやかな肢体。

それが、暗がりから二人の前に飛び出してきた。

『アオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

そんな、実体すら『妖しい』狼は、二人にしか聞こえない遠吠えを、二人に向けて放った。

「なんなんだよオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

識織は叫びながら逃げていた。とても非合理的だが、混乱を吹き飛ばすには最適だ。

もちろん、金髪の少女も一緒に逃げている。彼女の手首を握って走っている次第なのだが、如何せん、一般人であるため、一般人以上の速さは出せないでいた。

ここで、何から逃げているのか？ など、愚問に尽きる。

あの、黒い狼である。こちらは合理的に、声を上げることなく、ただただ詰めてくる。

ただ、三メートルという巨体の所為か、狭い路地に入ると走りにくそうにしている。まあ、それでも最後には、壁を砕いてやってくるわけなのだが。

「くっそ！　なんだよアレ！　どんな『異能』なんだ！？」

超能力と呼ばれる『異能』がある。それを識識は知っているし、もう分かつてはいるだろうが、彼も『ソツチ』の『異能』は持っている。

その中に、『^{クリエイト}創造』を称する能力者もいたが、それは『静』だった。その能力者は、効率が悪いと言っていた。

わざわざ『動』の物を創って、そういう『対象物を殺せ』なんていう設定をプログラミングするより、自分で剣を創って殺した方が早いからだ、と。

しかし、それは強がりに違いはないことは分かっていた。

ここまで状況に正確に対応してくるとなると、一個人の脳ミソではプログラムしきれない。

（知らない『異能』？　……なら、仕方がないか）

彼の、所有する、世間一般的に言うところの超能力。

それは、『真理の明眼』である。

簡単に言えば、いや、難しく言ったとしても——全てが分かる『眼』という説明以外は、出来ないだろう。

その瞳を『開眼』することによって、見たいと思った全ての事象・真理が、見えるし分かる。それがどんなに超越的物理現象であっても、超常的オカルト現象であっても、万物である必要すらなく、そ

これらの事象が分かり、干渉できる。

空気であっても、壁のように扱えたり、金髪の少女にしか見えな
いように設定されているモノであったとしても、見える。

彼の『眼』の前では、神すらも等しい存在となる。

『開眼』と同時に、両瞳が、紅く染まった。

血のように、夕焼け空のように、ただただ、紅く、染まる。
右眼により解析を、左眼により干渉を可能とする。

(……………見たこと、ないな)

やはり、生物ではない。機械仕掛け、というわけでもない。

そして——超能力ですらない。

まったく新しい、見たことのない、世界の真理の一つ。

解析するのにかかるの時間を要するほどの、複雑な情報を有した、
概念。

そこにプログラムされている命令は、『対象者を追跡すること』
だけだった。そこには攻撃性は無い。ただ、ストーカーのように、
ストーキングすること。

そして、最深部に——『解析を行った存在を、殺せ』

「ッ!？」

自分で自分の墓穴を掘った、というべきか。『真理の明眼』で見
るまでも無く、黒い狼の殺気が膨張する。波形状に繰り出される殺
気を視覚化して、避けながら前へと突き進む。

（空中に逃げるのは愚策、か——殺るか）

金髪の少女の手首を握っている方とは逆の腕を、一定の速度で振ると、袖からかなり大きめのナイフが飛び出す。柄の部分は黒く、完全なオーダーメイドと思われる、飾りっ気のないナイフ。

それを見た少女の顔が恐怖でくしゃりと歪むのを見て、「このまま走れ！」と大声で叫んだ。それを聞いたのか聞いていないのか、頷いたのか頷かなかったのか分からないように震えたまま、路地を走り抜けて行った。

ほっとする間もなく、振り向きざまに右手に握ったナイフでコマのように回転して斬りつける。

牙と直接ぶつかり、腕に直接衝撃が駆け抜ける前に、身体を横に滑らせ、ナイフの刃で受け流す。交差するようになったそのがら空きの横腹に、銀色の光を鈍く輝かせるナイフを逆手に持ち替え、掻き切らんと振り抜こうとする。

が、黒狼がその攻撃に対し高速で反応し、身体全体を回転させることでナイフの一閃を避けた。それと同時に、回転力を活かした前肢の一撃が、横に薙がれた。

殺意が込められた爪の鋭い一撃を、獣のように身を沈めて避けきる。瞬間、識織の両足の筋肉に、力が籠った。

身体を沈めたまま、ナイフを持った腕だけを夜空に向ける様は、まさに獣。

静から、動までの、ほんの一瞬。

「——死ね」

彼の前では、不死にすら、等しく平等に死が与えられる。
生きていない存在にも、存在していない存在にも、平等に死をもたらず。

さらに身体を沈みこませ、冷たいアスファルトに吐息がぶつかるのを感じた次の瞬間、組織の身体が霞む。

走り抜ける銀閃。

黒狼は、二度と少年の姿を認識することは無く、全身に幾筋もの線が奔り、白いモヤのようなモノを噴き出し、陽炎のように消え去った。

組織はというと、額に若干汗を滲ませて、黒狼がいた場所の真後ろにいた。

手に持ったナイフを学生服の袖に仕込み直しながら、今回のことについて考える。

今回のこと、というのはもちろん、黒い狼に襲われたこともあるが――自殺者が全国で増加していることも含まれている。

「『異能』が関わってんのかよ……。面白くもない」

そこで、身体の力が抜け落ちるのを感じた。戦闘行為自体は、全然消耗していないが、原チャリで身体全体を殴打したのが、今になつて効いてきた。

「あゝあ。体、なまってるな」

そう言いながら、はた、と、ある重大なことに気がついた。

「原チャリ……こけた……俺、痛い……原チャリは？」

どうなったの？ と。

全身から血の気が引くのが分かる。そして、全力で今自分が走って来た道を駆け抜ける。汗が、どんどん冷めていくのが分かった。そして――、

「お、俺の、俺の血と汗と涙と魂の残骸の血晶がアアアッ!!」

もちのろんで、大破はしていなかった。が、ボディの左半分のそこかしこが、へこみ、傷ついていた。

まるで、自分の身体が傷ついたかのように悶え苦しみながら、怨嗟の声を上げる。

「――は、はは、俺の、俺の愛車……………ブチ、殺すッ!!」

ここで、『これ以上の犠牲者は出さない！ 覚悟しろ黒幕!』と言わないのは流石というべきか、言わないべきか。

頭の中で修繕費を考え、計算しながら、ため息をついた。原チャリに跨り、「カタキ、とってやるからな」なんてことを言っただけで労わりながら、チープマーケットへと愛車を進めた。

傷だらけの格好のまま、店内へ。一目散にレジの方へと歩いて行く、

「とにかく五千円分。量が多いお菓子を用意し」

「いつもの感じですね」

「はい」

結果、そんじょそこらのスーパーとは違う、文字通りチープなマーケット、チープマーケットでは、特大レジ袋五つ分駄菓子が詰め込まれた。その中に、カップラーメンの袋が一つ分。

「ありがとうございますー」

一人暮らしの高校生にはイタイ出費だが、何故か識識はうきうきしていた。

もはや、先ほど上げた怨嗟の声など忘れてしまったかのように、スキップでもとりながら自動ドアをくぐる。

そして、原チャリを労うのも忘れて、早々と帰路についた。

第三話：『真理の明眼』（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第四話：ひなどり園

今は、既に朽ち果てて誰も寄り付かなくなってしまった廃病院。
外壁は黒い黴^{かび}が覆い、窓硝子は割れてしまい、もうすぐ取り壊しが
決まっている廃病院。

残骸。

数年前までは多くの患者が入院し、大病院ならではの忙しさに溢
れた病院で、しかしながらそこには鬱屈とした雰囲気はなく、爽や
かな病院、というのがコンセプトの病院だった。

だが。一度の医療ミス。死亡者。

一人の看護婦が、一人の患者のカルテを取り間違え、似たような
症状にある患者に、別の治療を施したことによる、拒絶反応および
ショック死。

よくある、廃病院になるパターンのやつだ。

そのの、よくある廃病院の一室。

ほかの部屋とは明らかに違う、調度され、黴も落とされた場所が
ある。

そこに、目に包帯をした白髪の少女と、黒い髪の男性。

「……見つけた。『異眼』」

黒い折り紙を、くしゃつと握りしめ、力を込めた。

その音に反応した白髪の少女は、その方に顔を向け、震える声で
呟いた。

「どうしたの、お父さん」

「……なんでもないさ」

かつて、神にその身の全てを懸けて祈りを捧げていた男がいた。それは、結局誰のためかと問われれば。

男は娘のためだと言い、

他人は紛うこと無き自分のためだと、そう言うだろう。

そして今、男は——悪魔に祈っている。

朝といえば、爽やか、というイメージがある人は、かなり充実した人生を送れている人なのだろう。逆に、眠い、だるい、という人が充実していないというわけではないが、一日に希望が持てている人、と言いたいわけなのだが。

「爽やかな朝だ！」

体に絆創膏やら包帯やらを装着している人間がそう言うと、不気味に思うのは決して悪いことではないだろう。

「さてはて、どうするかなー！」

昨日買ったお菓子を心底嬉しそうに眺めていた。

識組織は、そのお菓子を自分で食べるつもりなどない。誰か、他人のために駆ったわけである。

これで、数日間には寂しいご飯になるだろうが、彼が目指す目標のためならば、安いものである。

そして、朝ご飯を用意、といっても、トーストを焼くだけだが。ジャムなども用意して、テレビの電源をつけると、どかりとテーブルの前に座りトーストを食べ始めた。

ニユースでは、昨日飛び降り自殺をしたとされる、向かいの美人ねーちゃんのが報道されていた。

『都内に住む、赤影橙季さん、二十五歳が、先日投身自殺を――』

あれは、『自殺』なのか？ と識組織は思う。

昨夜の黒い狼に襲われていた金髪の少女を思い出す。アレは、超能力の産物ではないが、間違いなく『異能』の産物であった。

だから、それは、生徒会長の言うところの、間接的他殺、というやつなのではないだろうか？ と、そんな感情が堂々巡りする。

「うつん。分からなくなってきた」

『異能』 超能力と捉えていた識組織。しかし、それは改めなければならぬようだった。

「……………魔術、か？」

そう。超能力が創りだす事象は、力の塊といえいいか。もちろ

ん、脳内での事象を発動させるための演算はしなければならないが、それはほとんど無意識下で行われる簡単なモノである。

しかし、あの黒い狼には、明確な理論が適用されていた。

超常的で超越的な理論。不可思議で未解明な、明確な理論。そう、『術』のようなモノが組み立てていた。

1+1のような単純なものから、方程式など複雑なモノまで。

だからこそ、発動させる本人の脳容量は関係なく、複雑な命令を出せていたのか。

それらが分かりそうで分からない状況で、

「やーめた。どうせ見れば分かるんだし、次はもつとちゃんと見ればいいわけだし」

そう言っ、雑念を振り払うかの如く、ジャムを塗りつけ、トーストを齧った。

『——都内を中心とする自殺者の人数は、昨年度の二倍に達しており、これは不況によるものとする説や』

ニュースで原稿を読み上げるだけのキャスターをぼんやりと眺めながら、もぐもぐとトーストを咀嚼する。

いつも通り、オレンジジュースで飲みこむと、

「——魔術、か」

そう呟いて、トーストを再度齧った。

都内某所、孤児院。金が無くて、幸せが無くて、金が無くなって、幸せが無くなって生まれるモノがあるといえば、それは、溜め息と不幸と、孤児である。

ひなどり園。都内各所に点在する孤児院の中で、比較的小さな孤児院。

そこに、

「あ！ しきおりにいちゃんだあ！」

「ほんとだ！ おにいちゃん！」

ほんの少しばかりの『異能』を所有している、本多識織が現れた。厚めの黒いパーカーとジーンズ。両手にははち切れんばかりの菓子が入ったレジ袋が握られている。

「うおおー！ なんだこれえ！？」

子供の人数が十人程度のひなどり園であれば、二週間はもつだろう。

識織は、「ちゃんとみんなで分けるんだぞー？」と笑いながらそれを渡すと、騒ぎながら、ひなどり園低年齢層組、二、三人が持つて行った。

それを微笑みながら見つめていると、識織と歳が近そうな、深い

藍色の髪を持った少女が近づいてきた。

「識織さん、いつもいつも、すみません」

「いいんだよ。藍華さん。こっちこそ、いつもいつもやってきては、楽しませて遊ばせてもらってるから」

と、最大級の笑みを向ける。藍華と呼ばれた少女も、それを見て笑いを零した。

「それにしても、やっぱりこれだけの子供の面倒を見るのは大変だろう？」

「ふふ。お父さんもお母さんも働いてますから。私が頑張れば、子供たちが笑ってくれる。それだけで、私、頑張れるですよ」

彼女は、十六歳。しかし、高校には通っていない。父親と母親が始めた孤児院をやりくりするために、ここで働いている、というベキか。

だけど、そんなのは全然苦になっていないらしく、毎回同じような質問を投げかけている識織に対して、毎回同じ回答をするのだ。それも、笑いながら。

「じゃあ、識織さんは、なんでここに？」

しかし、彼女から識織に質問をすることは無かった。

識織は、なんとなくまだまだ蒼い空を仰ぎ見る。自分は、孤児ではない。今は、『家庭の事情』で家族とは離縁状態だが。そこに、彼らと同じ苦しみを味わったから共感できる、という理由はない。

「ん、ここの子供って、泣かないよね」

「へ？ え、あ、はい。転んだりしたら泣きますけど、癇癢を起したりはほとんどしないですね」

「本当は、」

ほとんど間を置かずに、

「泣きたいはずなんだよな」

そう、言った。

様々な理由があり、彼らおよび彼女らは親に捨てられた。彼らからしてみれば、自分は何も悪くないというのに。

本当は、本当は泣きたいはずなのに、当たり前散らかしたいはずなのに、今日も彼らは、笑う。

「だから、泣かせてあげたい、のかな？ 嬉し過ぎて、泣けるぐらい」

俺がここに来ることで、少しでもそれに近づくなら、素晴らしくない？ と、少し悪戯っぽい笑みを浮かべる。

彼の習慣は、ここ、ひなどり園に遊びに来ること。決して、藍華を口説きに来ているわけではないのだ。

識織は周囲を見回し、「そりやそうか」と呟くと、藍華に、

「あの娘は、どこに？」

「えっと………いつも通り、あの場所に」

そう言つて、藍華が指をさしたのは本館。地域住民とのふれあいの場所。

「仕方がないのは分かっているんですけど」

「……………」

仕方がない。そうなのだろう。

じゃ、ちよつと行つてきますよ、と識織は後ろ手に振りながら、本館・ふれあいの場へと足を向けた。

その後ろ姿を眺めながら、溜め息。

「……………はー。いいなあ、イブちゃん、羨ましいよ」

切なげに笑みを浮かべると、とぼとぼと子供たちの方へと歩いて行つた。

「お兄さんがやつてきたよー」

がらつ！ と勢いよくガラス張りの戸を開くと、ふれあいの場に入る。

周囲にはファンシーな人形や、お城の張りぼて、手作り感溢れる

着ぐるみなど、学芸会に使うようなものが多く置かれている。

そのファンシーな人形の山の中に、一つだけ生気を帯びた何かがいる。それは、白い、純白の髪を持ち、色素の薄い瞳を持った、オンナノコ。

まるで人形のように無機質でありながら、そのなまめかしさは人間のソレで、日の光を浴びたことが無いような白過ぎる指で、分厚い本のページをめくっていた。

「イブちゃん。こんにちは」

「……………」

十二歳ほどの少女イブ——園木^{いず}斎歩。当て字としてイブと読むのだ。

識織は、その少女の前に中腰になると、へらっと笑って、

「お菓子買ってきたんだけど、一緒に食べない？」

「……………いらん」

識織に視線を向けず、一言で切り捨てた斎歩。

そんな少女の姿に苦笑いを漏らしながらも、頭をぼりつと掻き、再度チャレンジ。

「めげないぞ俺は。イブちゃんが話してくれるまで、諦めない」

「さっさと諦めるロリコン」

ペラっと、軽い調子で分厚い本のページをめくると、くあっと欠

伸をした。

若干涙が零れた紅い瞳で無音を見ると、面倒臭そうに口を開いた。

「面倒臭いぞ、キサマ。ボクにかまうなと言っているだろう」

十二歳程度の口ぶりとは思えない、大人びたというより、達観したように語るのだ。

紅い瞳を、伽藍の洞のように見開いて、ただ、じっと識織のことを見つめていた。なにも感じていないかのように。

だが、識織。識織は動じない。

「やだな、イブちゃん。人と話すのをやめちゃうなんて、それすなわち文化を捨てるってことだよ。人間最大の文化は、対話さ」

「知るか」

「ほら、そうやって切り捨ててばかりいるから、君の中にはなにも溜まらないんじゃないかい？ 空っぽってうのは、悲しくないか？」

「別に」

「——信じるのが、怖いのか？ わかるよ、その気持ちは」

「黙れ」

「だけどね、イブちゃん。そのやり方は、よくない。怖いからって、怖いからって逃げてばかりいるのは駄目なんだよ。たまには逃げるのもいいのかもしれないけど、ちゃんと向き合うことだって、」

「五月蠅い」

「——大切なんだよ。きちんと誰かと向き合う。それが人間にとって大事なことなんだ」

「消える」

「君がなにを『視て』しまったのかはわからないけど、それでも、君は戦わなくちゃならないと、俺は思う」

「死ね」

「過去に絶望したのか、未来に絶望したのか、俺にはわからないけど、さ。イブちゃん、君には現在^{いま}があるじゃないか。現在と向き合っ
ていこうぜ」

「嫌だ」

こんな問答、そんな返答が、およそ一時間続いた。
どちらも譲らず、識織は自分でも笑えるほどの綺麗事を言いまく
り、斎歩はなにも感じないままその全ての綺麗事を拒絶した。

第四話：ひなどり園（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第五話：ひなどり園（2）（前書き）

……まさか、この小説は、バトルという皮をかぶった、文学小説なのか？

と疑うほどに、考察が多い小説となっております。

第五話：ひなどり園（2）

「識織さん、どうでしたか？」

と、少しだけ心配そうに尋ねてくる藍華。「どうでしたか？」と聞かれれば、識織としては、「そうでした」としか答えようがないのだが、無理矢理答えを創る識織。

「そうですね、喋ってはくれるんですけど——子供らしくないと言え、そうですね」

あのしゃべり方は、十二歳では絶対に獲得し得ないような喋り方。精神が未成熟な小学生には、演技でも不可能に思われる。最近の小学生は大人びているとは言っても、アレはそれ以上だった。

大人びているというより、達観している。

もう、『視てしまった』かのような、そんな雰囲気。視て、分かってしまったからこそ、諦めているような。

「まあ、子供が意地はってるって思っていれば、可愛いモンっすよ。逆に微笑ましいというか、なんというか」

「そうだと、いいんですけど……」

「そうだ、藍華さん。イブちゃんがひなどり園に来た時の様子、教えてくれませんか？ 何か、分かるかもしれません」

過去と現在は、絶対に繋がっているはずだ。

急に興味を持ち始めたことだって、それは昔、小耳にはさんだりちらつと見たりしたことで、それが何らかのきっかけを受けて、意識の表面に浮きだしてきたのかもしれない。

あの徹底的なまでに無関心は、人間的に見て、過去に何かあったと思わざるを得ない。

藍華は、少しだけ躊躇った様子を見せて、そして口を開き、動き始めた。「あのですね？」と。

「あんまり、子供たちの過去を掘り起こしたくないので、言いたくないんですけど……」

けど、と、

「あの子がまた、表情を見せてくれるなら」

「ありがとう、藍華さん」

定型的に頭を少し下げる識織。

下げた頭を上げながら識織は思った。この藍華の言葉で分かったことは、やはり、昔の斎歩は表情を解放していたということ。そして、やはり、過去なにかしらのことがあったということ。

……まあ、このひなどり園にいる子供たちには、それとない過去があるわけだが。斎歩の場合は、それが特に顕著なのだろう。

「イブちゃんは、比較的年齢が高い時に、このひなどり園に置いて

行かれたんです」

「最近？」

「ええ。そうですね、識織さんがここに通うようになる一年前ぐらいでしょうか。最初見たときは、いつもニコニコしていて、元気な子供だったんですよ。ここに、置いて行かれる直前まで」

それから、というものだ。

「親は、そんなイブちゃんを化物でも見るような目で見ていたんです」

「——アルビノの所為か」

あの白髪紅眼。なにも、ファンタジーな要素があるわけではなく、脱色でもなく、——生まれつき。

先天性白皮症。生まれついて細胞のメラニンが欠乏している病気のこと。そのため、紫外線には特に警戒する必要がある、視覚障害や皮膚癌などを起こしやすくなる。アフリカの南東部では、その体には不思議な力が宿るとされ、臓器や体の一部を狙った殺人が後を絶えない。

だから斎歩は、あの薄暗い部屋でただ一人、分厚い本を読んでいる。

「アフリカ南東部では『神の子』とかって呼ばれているらしいです。から。イブちゃんのご両親は熱心なキリスト教徒で——逆に、怖かったんでしょうね。自分たちが信じるその存在そのものが、目の前に現れるっていうのが」

信じたものは、不明確であるからこそ、信じられる。実物を見て、後悔しないように。

それは、アイドル信仰と同じようなものか。代表例で言えば、アイドルの排泄物は卵で云々。盲目の盲信だ。

その後、藍華は少し口ごもって——言った。

「離れるのが嫌で、泣き叫ぶイブちゃんに向かって、父親の方が、こつ言っただんです。とても、冷たい目で。——」お前に未来なんてないんだ』って」

一瞬。識織の瞳が死んだように虚ろになると、そのまま悪態を吐いた。

「……………クソ野郎」

「……………それから、涙が止まって、声が止まって。……………まるで、のつぺら坊みたいになって、立ちつくしていたと思ったら、一人であの部屋に行っただんです」

親にとって、子供とは何なのか。

神や、仏の教えよりも、軽いものなのか。いるかないかも分からない、不明確な存在よりも軽いというのか。

子供は、所詮は授かったモノとしてしか見ることが出来ないのか。自分たちのチカラで産み育てた子供を、他の力で授かったと形容するのは、おかしくないだろうか。

——本来ならば、こつやって悩む必要などないはずなのに。

理由など、考える必要などないはずだった。理由なんてそんなも

のは、ないのだから。

親が子供を護りたいと思う気持ちは、理由なんて御大層なものはないはずなのだから。

識織とて、今は親と仲違いをして、一人、愛知から東京まで上京してきたわけだが、それでも両親は自分のことを心配しているだろう。……少々厳しい所があり過ぎるのだが。

「持っていたものを失う辛さは、測り知れません。多分、そのことで精神的^{トラウマ}外傷を負ったんだと思います」

「……本当、識れたモンじゃないですね」

人とは、残酷だ。

残酷を、酷使し過ぎだ。

本当に、わからない生物だ。

第五話：ひなどり園（2）（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第六話：死ぬ瞬間

帰り道。もちろん、ひなどり園からの帰りである。

午後五時には帰らないと、今度は識織が藍華の面倒になってしまったので、彼は自主的に帰るようにしている。帰る際には大体いつも、『かえらないでー』とか『今日泊ってけばー』とかいう感動的なことを子供たちが言ってきたくれる。ちなみに、藍華の両親であり、ひなどり園の経営者である二人は、識織のことを知っている。

びすがすと、ヘンな音を上げるエンジンを気にしながら、原チャリを押して帰るのは面倒なのでアクセルを回し続ける。

随分とボロくなってしまった相棒。哀愁を漂わせているが、上に乗っかっている彼としては、なんとも情けなく感じてしまうその姿。早く修理に出してやろう。

そう決心した。

それから考えるのは、やはり斎歩のことか。

あの伽藍の洞のような瞳に何を抱えているのか。あの全てが消え去った純白の髪は何を思っているのか。

そして、彼女の親の言葉は、彼女に何をもたらしたのか。何を奪っていったのか。何を殺してしまったのか。何を壊してしまったのか。何を終わらせてしまったのか。

識織は、原チャリのアクセルを若干強く握りしめながら、顔にぶつかる空気に顔をしかめ、自問自答する。

以前だ。以前、識織がまだ中学生だった頃、ある一人の少女を救

えなかった。彼は、その少女の心の闇に気付くのが遅すぎた。後悔なんてものじゃない。悔しさなんてものは生まれなかった。ただ、憎しみが生まれた。

だからこそ、と言っではなんだろう。

識織は、その時の自分と今の自分を。そして、その時の少女とあの伽藍の洞の少女を重ねてしまっているだけなのかもしれない。ただ、似ているもので償おうとしているだけなのかもしれない。

この世界に代わりが効くモノなんて、無いのに。

今と過去は、代わりになるわけがないのに。

重ね合わせてしまっているのか。

そう思うと、少し滑稽な感じもする。だが、だからと言って、今更やめることなど出来ない。

伸ばした手は、助けられるまで伸ばす主義だ。

だから、彼は、彼こそが識る必要がある。あの伽藍の洞の少女が、どうしてあなってしまったのかを。

「考察は、あんまり得意じゃないんだけどなあ。だけど、こんなところで『眼』に頼るのも、なんだし」

『真理の明眼』を使用すれば、こういう、概念系の問題はすぐに分かってしまう。まるで、全ての努力を嘲笑うかの如く、この『眼』を使用して、何かを知ろうとした瞬間、全ての真理が彼には分かっている。

だが、それでは駄目だ。それでは、あまりにも意味が無さ過ぎる。

オレンジ色に染まって行く空のように、ただ蒼から橙に変わってしまうだけだ。変わってしまうだけでは、意味が無さ過ぎる。

進行のプロセスをすっ飛ばして得た何かなど、得る必要などない。

それは誰も幸せにはしないし、不幸にもしない。ただの結果など、誰も必要とはしない。

だからこそ、識織はこの一年。一度も彼女に『真理の明眼』を用いたことは無い。

これは、あの少女の為にやっていることだ。あの少女がまた笑えるようになるには、泣けるようになるにはどうしたらいいのか。

それは、識織が異能を使ってわかったとしても、あの少女が分かっているなければまるで意味がない。

結果として、最終的に、結論的には——あの少女は、自分で自分を助けるしかない。

こちらは、手助けしかできないだろう。

ここで、自問自答。

自問：誰が誰を助けるのか。

自答：識るか。

週末の日曜日。すでに百年は続いているとされる国民的アニメを夕焼けが差し込む部屋の中で眺めていると、ふと、ノスタルジックな気持ちになる。今ではあまり見ないような家族形態。その中で繰

り広げられる、ありふれた日常を少し誇張したストーリー。

国民的、というのはつまり、あるのが普通という存在だろう。ポテトチップスと同じようなものだ。

それが無いと、何か落ち着かない。それを見ないと、そういう気分にならない。

なにはともあれ、古き良き存在だ。

「ああ、暇だ」

しかし、高校二年生十七歳である本多識織少年にとっては、少し刺激が足りないものだったらしい。

テレビのリモコンはタッチパネル式。ある程度文明が進化すると、しなくてもいいものまで進化するのが難点だ。いくつかのチャンネルを飛ばし飛ばし見ながら、何かないかなあ、とぼんやり眺めていた識織。

すると、あの連続自殺事件が超常現象を取り扱う番組で放送されていた。

『すると、今回の件はなにか不思議な力が働いていると？ 超常現象研究所所長の有賀見先生』

コメディタッチ風に、白衣を着た壮年の男性に語りかける司会者おそらく、今回の件で視聴率を伸ばそうと試みているらしい。どうせ、番組が終わった後には『ご遺族の方々に追悼の意を表して』とかなんとか言っておけばいいとも思っているに違いない。

質問された壮年男性は、神妙な顔で答える。

『はい。この世界には不可思議な力で満ち満ちていると、私は考えられています。そもそも、この世界の現象には全て原因が存在します。その原因にも原因が存在し、さらにその先にも……と続いていきま

す。それが、途中で途切れるわけですね？　そこが、物事の真理と
言うもので――」

なんだか、結構深いことを言っているような気がしなくてもない
が、そこまで面倒なことをしなくとも、真理はそこら中に転がって
いる。

というより、この才力研の部長のような壮年男性、話が逸れ過ぎ
である。

『――なのですが、この自殺の共通点。みなさんは知っているでし
ょうか？』

『錯乱したように、何かから逃避するように、最後は命を断つとい
うところでしょうか？』

司会者の男が壮年男性に答える。

壮年男性は、「はい」と頷くと、座っていた机の下から一枚のボ
ードを取り出した。

『ここは私にもわからないのですが、ここに、ある死の概念が存在
するとします。それは具体的なものでも、あやふやなものでも構い
ません。それが死だと悟った時から、ようするに、自分の死期を悟
った時から人間はいくつかの段階を踏むと言われています。これは、
元シカゴ大学精神医学部助教授・医学博士のE・キューブラー・ロ
スという女性が、二百名を超える凜氏患者などとのインタビューか
ら、死期を悟った人間が引き起こす反応とその後の過程を五つの段
階に分けて説明した「死ぬ瞬間」という著から引用したものなので
すが――』

それなら、識識も知っていた。嗜み程度ではあるが、そういう本

には何度か目を通したことがあった。

第一段階として『否認』。

自分が死ぬという事実を受け入れられず、否認することによって崩壊する自分を保とうとする。

第二段階として『怒り』

否認ではもはや維持できなくなると、憤怒や、羨望、恨みなど、負の感情が第一段階にとって代わる。

第三段階として『取引』

本能的に分かっている『良いことをすればそれ相応の報酬が得られる』ということを、死の数日前から行う。これは、一種の信仰と同じで、神との取引とされている。

第四段階として『抑鬱』

これには二つのパターンがあり。『反応抑鬱』と『準備抑鬱』と呼ばれる。

『反応抑鬱』は、大きなものを失くしたという喪失感。

『準備抑鬱』は、この世との決別を覚悟するための準備的悲嘆。

第五段階として『受容』

無の境地に達する。感情がほとんどなくなり、一人きりにされたいと望む。

これらの段階で、様々な感情——所謂、生への執着と猛烈な戦いをする。

『受容』に至れば、もう後戻りはできない。

自ら死へと向かっていく。

『その、死の概念が迫ってくるとします。あなたなら、どうしますか？』

『必死で、逃げますかね』

「戦う、かな」

テレビに向かつてばやく識織。

元からの知識も相まって、壮年男性の言いたいことが大体分かってきたらしい。

『その逃げている段階で、「死ぬ瞬間」に記されている五つの段階を上っているわけです。下っている、と言ってもいいでしょうか』

死の概念——あの、狼。それが、この言葉に相当する存在になるのだろう。壮年男性はそのことには気づいていないだろうが、ほとんど本質を突いていた。

もしかして、この人は、本当は凄い人なんじゃないか？ と、識織は思ってしまった。

『「受容」の段階に入れば、既に死を受け入れている状態ですから、自ら死へと向かうわけです。それが、自殺となって今現在、全国で急増していると私は推測します』

『ですが、その死の概念と言うのは、なんなのですか？』

それを聞いたら、何もかもが台無しになるのが分からないのだから？ この司会者は。

識織は、今からオカルト派と非オカルト派の醜い言い争いが始まる前に、テレビのチャンネルをさっさと変えてしまった。

移り変わるチャンネルを眺めながら、識織は考える。

迫りくる死に対して、自殺者たちは何を思ったのか。

……まあ、それは人それぞれなので、識織には分からないことだった。

オレンジ色の夕日が、少し紫色に変わった頃。

識織は面倒臭そうに立ち上がり、キッチンへと向かった。今日の夕飯は、カップラーメンになりそうだった。

第六話：死ぬ瞬間（後書き）

E・キューブラー・ロス著の「死ぬ瞬間」から引用。

ご感想・ご批判・ご指摘、お待ちしております。

第七話：高校生の日常および非日常

流石に。

流石にあのぼろっちい原チャリで登校するのは憚られたので、久々の自転車での登校となった。自分が原動力と考えれば、自転車だって原チャリである。

少しでも下着に染みた汗を乾かすために、服をパタパタさせながら教室に入ると、何か待ち構えたように識織の席の前には、クラスメイトAがいた。

「おっす、クラスメイトA」

気さくに話しかけた識織。気さくだが、呼びかける言葉に悪意を感じるしかなかった。

「なんだよその名称は」

「名前で言うのが、腹立つ」

「なにその理不尽！」

「アキラくんのAだよ。それ以外のなんだっていうんだいアキラくん」

「アキラじゃねえ！ 俺の名前は、」

「あ、先生きた。ほら、席つかないと反省文書かせるぞ」

「なんでお前に反省文を書かせられないといけないんだよ！ お前の態度に対して、俺が反省文を書かせてやりたい気分だ！」

「え、なに？ 三文字以内で今の感想を述べよ？」

「なにそれ、どこにそんな要素があつたんだよ！」

「黙れ。ほら、句読点も含めて、三文字以内だ。百点満点中百点じゃねえか。それに、今の感想を的確に述べている。俺って、もしかして文系なのか？」

「黙れ！」

「はいはい。知ってるか？ テスト用紙には感嘆符を使っちゃいけないんだぜ？ アキラくん」

「だから、俺の名前は！」

「アキラくん。いつまで本多くんの前の席にお邪魔になってるの。井上さんが困ってるじゃないの」

「先生までっ!？」

味方のいなくなったクラスメイトAは頭を抱えると、「うわーん！」と叫びながら自分の席へと戻って行った。物凄くいじり易いキヤラだった。

そんな憐れなクラスメイトAに敬意を表して、合掌。

昼休みと言えはお喋り。

学校内における話題のタネと言えば、友人の行動、先生の行動、昨日のテレビ、恋愛情報等々、多岐に渡る。

その中でも一際注目を浴びるのが、生徒会役員の動向。および観察である。

生徒会役員、総勢五名で構成される、学校内最高権力たちの情報は学校で暇をする生徒たちにとって格好の餌となるのだ。目立つ人間から搾取される。これは、どんな大きな規模でも小さな規模でも、同じことだ。

「知ってるか、本多」

朝のショートホームルーム活動で踏んだり蹴ったりだったクラスメイトAが、また性懲りもなく識織の前の席に座っていた。識織はと言うと、面倒臭そうに低反発枕に突っ伏しながら、それでもクラスメイトAの話に耳を傾けていた。

「なにをだよアキラくん」

「だからアキラじゃねえって言うてんだろっが」

「冗長になるから、アキラくん。アキラくんがいいじゃねえか。カッコいいんだし」

「……わかった、アキラでいい」

「小説や漫画、およびエロゲでよく使われそうな名前だけだな」

「却下だア！」

名前でいじる、小学生レベルの言い合いをしている高校生の姿がここにあった。

話を戻す為に、「ったく、俺の名前は」と繋ごうとしたクラスメイトAだったが、「アキラくんだろ？ 知ってるって」という識織の相槌でまたも自己紹介が出来なかった。

「……話を戻すが、知ってるか、本多」

「なにをですかアキラくん」

本多識織という男は、しつこい男だった。

「……金曜日にな、あの生徒会長がとある男子生徒、それも生徒会役員じゃない奴を生徒会室に招き入れたらしい」

どくん、と胸が高鳴った。しかし、それは期待などの正の感情ではなく、嫌な気分になる方の、高鳴り。まるで、『犯人はお前だ』と言われたような、そんな感じ。

しかし、クラスメイトAはそのことの気が付いていないのか、「その男子生徒はあの鉄壁の生徒会長の恋人なんじゃねえかって噂されてんだよ」と自慢げに語っている。

(……は?)

識織は呆けた。識織は呆けた。識織は呆けた。
思わず、スリーアングルで呆けた。

(待て、待て待て待て待て待て待てマテマテマテ。俺が、いつ、生徒会長に、フラグ、をたて、た！)

「いやあ、その男子生徒っていうのがさあ、平凡な容姿らしいんだわ。ここで、まさかの、生徒会長面食い説が崩れ去ったわけだよ。今まで幾億の男共が、一説には先生の中にも告った奴がいるらしいんだけど、それら全てを跳ねのけてきた無敵の生徒会長殿がねえ。やっぱり性格なのか？ 男ってのは性格が大事なのか？ 同志よ、年齢〓彼女いない歴の同士よ、俺に教えてくれ」

……なんだかとてもなく勘違いをしているようだが、組織にそんなことを聞いても分かるわけが――あった。

「……話題性が、大事だと思うよ」

「よつするに、派手になれっつーことか」

「……いや、今話題の的になることだよ、多分」

「ふうん。そうなのか」

間違ったことは言っていないはずだ。あの生徒会長の好みは、ズバリ『面白いこと』。人ではない。こと、なのがミソである。

「実は俺、会長みたいな女の子、好みなんだよ。ほら、年上のお姉さん、包容力でいろんなナニを包み込んでくれそうだし」

「……潰されるぞ、いろんなナニをな」

「ん？ なんか言ったか？」

「いや、お前の夢を壊さないためにも、言わないでおくよ。さあ、

アキラくん。エロゲの主人公の如く、生徒会長源終夢を攻略して来い」

「だからアキラじゃ！」

「識織くん、ちょっといいかしら」

ざわつ、と、クラスメイト達の視線が全て、全て識織に向けられた。クラスメイトがクラスメイトに向ける視線ではない。肉食獣が獲物に向ける視線。被害者が加害者に向けるような視線。

あの、完璧で謎多き生徒会長に、何故お前ごときが呼び出されるのだっ！ という視線だ。

妬み辛み好奇心その他諸々の感情が、クラスメイト達全員から向けられていた。

ここまで人の感情に曝されたのは、恐らく中学生の時以来か。まあ、あのときはたったの一人から、これ以上の感情をぶつけられたわけなのだが。

それにしても、人の感情というのは、単純というか複雑というか、識織少年にはそこすらも掴めなかった。掴みたくもない、と言った方が正しいのかもしれないが。

「識織くん、ちょっといいかしら」

ここで、識織は生徒会長源終夢を完璧なまでに無視しているのに気がついた。完璧な生徒会長に対する意趣返しか。しかし、それにしては、識織には生徒会長に意趣返しをするようなことはされていないかった——されていたが、しようとは思っては無かった。なので、ここでは偶発的事故、ということになるだろう。

それにしても、生徒会長源終夢が言葉を発するたびに、識織に向けられる感情の威圧感が上がっている気がした。それは気のせいだと信じたい、いや、でも逃げるのはどうかと思う、本多識織少年だった。

「識織くん、ちょっと、いいかしら」

少しだけイライラしてきたのか、それとも最初の無視とは違い、今度の無視は故意的なものだと気付いたのか、発せられた言葉がぎくしゃくと強張っていた。

識織としては、これ以上を無視したら公衆の面前で生徒会長源終夢がどんな行動に出るのか興味があつたが、額に青筋が寄っているのを見ると、生徒会室でなにをされるのか分かったモノではないので、とりあえず返事をすることにした。

「なんででしょうか、源先輩」

ただし、低反発枕に突っ伏したまま、だが。

「ちょっと、いいかしら、本多識織くん」

名前を後回しにしたところを見ると、そろそろ限界か。返事をしたのに、内容的には同じ質問が返って来たところを見ても、同じだった。

識織は低反発枕に精一杯の静かな溜め息を漏らした。そして、最近の高校生らしく少しだけファッションを気にした髪形をぼさぼさと乱してから、勢いよく立ち上がった。周りからどよめきが起るのが痛々しい。

「し、識織」

「名字で言うつていう、繋がりが深いのか浅いのかよく分からない
キャラ設定が崩れてるぜ、アキラくん」

「だから、アキラじゃない……」

ツツコミがしょぼくなってきたところで、識織は生徒会長のところに向かつて歩き出した。教室で固まっているクラスメイト達を掻き分けて、教室の出入り口に向かう。教室の外にも明蘭学園の生徒たち（何故か三年生もいる）がいつもでは考えられないくらいにいた。どうせ、生徒会長見たさの野次馬どもである。無視して構わなかった。

ようやく。ここまで教室の外に出るのが疲れたことは無かった。

ようやく識織は、額に青筋を浮かべて眼を細めて微笑している生徒会長の下に辿りついた。

「やあ、生徒会長さん。俺に、何か用があるんですか？」

ずいつ、と。生徒会長は彼女の吐息が耳にぶつかるぐらいまでに顔を近づけてきた。そこで女子からの黄色い声と、男子からの野太い罵声が響いた。

その中で、生徒会長は識織だけに聞こえる声量で、こつ、言った。

「……………あなた、死ぬ？」

ぞくり、と識織の背筋になにかが奔り抜けた。勿論、被虐的趣味から来る性的快感などではなく、死に対する本能的恐怖が背筋を凍らせたのだ。

このままでは凍らされたまま、するどい膝蹴りで粉微塵に碎かれてしまう予感がした識織。勿論、精神的な意味でも、肉体的な意味

でも、だ。

識織は、少し凍りついたような声で、空気を多めに排出しながら、
声を出した。

「イエ、生キトウゴザイマス」

「うん、よろしい」

第七話：高校生の日常および非日常（後書き）

生徒会って、絶対に五人なんかじゃやりくりできない。僕は、この一年でそれを実感させていただきました。

え？ それを言うことに何の意味があるのかって？
意味なんて、あってもなくても、同じこりゃ

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第八話：議題その一

「うん。一度だけ殺すけど、我慢してもらえるかしら本多識織くん」

「生徒会長殿。人間は一度死んでしまうと、生き返ることはできないのです。人は、一回しかない人生を大切に生きるべきだと、ワタクシは考えておりますですはい」

「生き変えるのだったら、出来るんじゃないかしら」

「変わっちゃったよ！俺、生き変えたら、あの娘と結婚するんだ……ってしねえよ！」

「あら。死亡フラグを建てて、ご立派ね、識織くん。自ら死地へと赴く準備をするだなんて。いいわ、その意気やよし。存分に生き変えらせてあげるわ。存分にそのフラグを回収なさい」

「だから死にたくないって言っているじゃないですか生徒会長殿！それに自分でフラグは折りました！っていうか、源先輩って、死亡フラグとか知ってる人間だったんですね意外！」

「私を舐めないで欲しいものね、識織くん。それぐらい、前世から知ってるわ。私を誰だと思ってるのよ。あなたでは絶対に計り知れない存在よ」

「なんて高貴な存在……ッ！ 喋るのすらおこがましいし、目の前にいるのすらおこがましい。いや、実に。なので、俺は帰らせていただきます」

「ただかなくていいわよ、識織くん。こんな冗長な語らいなんて、本当、プロローグですらないのだから。今から本編よ、識織くん。物語の核心へと踏み込もうと思うわ」

……とまあ、本当に無駄な語らいを、五分ほど続けた後、生徒会長源終夢と、一高校二年生本多識織は、会議テーブルを挟んで向かい合うようにして座った。

今は昼休み、明蘭学園の昼休みが他校と較べると長いのだが、それでもたかだか一時間程度。最初の方に三十分ほど食事をしたので、残りは三十分ほど。さっさと終わらせてほしいものだった。

「で、きみ、私と別れてバイトに行ったその帰り道、チープマーケットに向かう途中に、また自殺事件に関わり合ったらしいわね。そのトラブル体質。どうか私にも分けてほしいわ。人生が楽しくなりそう」

「あれ？ なんで俺の金曜日の生活がここまで赤裸々に露呈しちゃってるんだ？ やだ、……恥ずかしい」

いくらなんでも、生徒会長の権限を超えた何かが見え隠れしているとは思えない。それとも、この面白いことが好きな源終夢という女性は、識織のトラブル体質に^{あやか}肖るうとして金曜日の彼の動向をストーキングしたとも言うのか。

それはそれで、別種の怖さを感じた。

「恥ずかしがって赤面しないで、気色が悪くて吐き気を催すレベル

だから」

「俺の顔面はそこまで酷くないと思う！ 良く見たら中の上ぐらいには見えると思うんですけど！？」

「あ、大丈夫よ。私、男が赤面したのを見たら、大体言ってる台詞だから。今迄に言った人数も明確に憶えているわ」

何人が犠牲になったのか、識識としては少しだけ気になった。自分と同じ気持ちを味わった人間が、どれくらいいるのか。

「一人よ」

「俺だけじゃねえか！！」

「良かったわね、私のハジメテの人になれて。私のハジメテを貰える人間なんて、あなたをおいて他にいないわ」

「エロく言ったら男が喜ぶとか思わないでください！ 嬉しくないですから！」

「だって、男が赤面したのを見るの、あなたが初めてなんですもの」

「……………」

それを言われると、男として気持が悪かった。

言われてみれば、男が赤面したのを見るなんて、気色が悪い以外他ない。男の赤面が許されるのは、幼い少年と、イケメン（女顔）だけだ。

「あなたと話していると、どうしても冗長になってしまっわね。煩わしい」

「指摘させていただきますと、語尾につくワタクシめを侮蔑する単語でございましょうか」

「そうね、改善させていただくわ、識織くん」

おほん、と。話を仕切り直すように、場の空気を零にするように、咳払いをする終夢。それを皮きりに、この場の雰囲気引き締まった。どうやら、お惚けフェイズはしばらく身を潜めるようだった。

「識織くん、そこで、金髪の少女を助けたそうね。自分の愛車を犠牲にしてまで。迫るバケモノから、間違いなく不審者と思われるナイフを取り出してまで」

「……………」

そういう武勇伝的なものは、脚色されたくはないと思っていた識織だったが、ここまで本当のことをずけずけ言われると、心が傷つく。武勇伝的なものは、脚色されてこそ武勇伝的なものなんだと、改めて認識させられた。

……まあ、今の話で、大体の全容は掴めてきたわけだが。

「入ってきていいわよ、風莉」

「……はい、終夢様」

識織が何に驚いたかという、彼が入ってきた別口のドアから入って来た、先日助けた金髪の少女ではなく、高校生同士で様付けの

関係をリアルに見れたということだった。絶滅する以前から、存在していないと思っていた組織だったが、これに対しても認識を改めなければならなかった。

その別口から入って来た金髪の少女は、此处、明蘭学園の制服を着ていた。そして、名札も校章も着けている。どうやら、生徒会長が不可思議な権力を使って入手した制服を着ている——というわけではないようだった。

「先日は助けていただき、ありがとうございます。本多識織先輩」

「えっと……どういたしまして？」

終夢が言った、『風莉』という言葉と、名札の『白船』という単語を合わせて、白船風莉しらふねふうりというのだろうか。

それにしても、この学校に染髪をした生徒がいるとは意外だったというべきか。この天下の進学校に。しかし、この学校にいるということは、ようするに、頭脳明晰または身体能力抜群のどちらかが備えられているというわけだ。

……お世辞にも、そうは見えない体つき。および顔つきだった。いや、ここは人は見た目で判断するべからずという先人からの知恵を遵守すべきなのか。それとも、客観的感想をそのまま適用すべきなのか、悩むところだった。

「なんで疑問形なのよ、識織くん。女の子を助けたんなら、もっと堂々としていなさいな」

「どやあ」

「どや顔はしなくていいわ。返ってだらしく見えるだけだから。」

まあ、返らなくてもだらしないんだけど」

「どこが!？」

「人の前で、簡単に『異能』を使っちゃうところとか、ナイフを使っちゃうところとか、かしら。能力者としては致命的ね、識織くん。自ら一般人と思しき人間の前で不可思議な現象を起こし、更にナイフまで持ち出すなんて」

「……………」

言われるたびに、識織には言い逃れができなくなっていった。

能力者が日常生活を送るにあたって注意すべき点はいくつかあるが、その中での代表例として一番に挙げられるのは、無闇に能力を人前で使わない、だろうか。

識織はその上、ナイフまで持ち出してしまった。もはや、彼女からは識織のことが一般人には見えないだろう。銃刀法違反の上に、ミュータントである可能性すら見せつけられているのだ。

「まあ、そのことに関しては気にしないでいいわよ、識織くん」

「へ？」

「その娘、能力者だから」

「……へえ」

「……っ」

識織は小さく体を震わせた金髪の少女——風莉を興味深げに眺め

た。

この学校は、どうやら『異能』を持った人間が多いらしい。自分、本多識組織に始まり、目の前の生徒会長・源終夢、『創造』^{クリエイト}、そして風莉。

ここまでくると、偶然で済ませては、偶然の定義があやふやになってしまう。

終夢は、くすくすと笑うと言葉をつなげた。

「能力者といっても、ほんの微弱なものよ。あなたの『真理の明眼』や、私の『波動』とか、あなたが入学当時命懸けで戦わざるを得なかった『創造』^{クリエイト}なんかを相手にしたら、数瞬ともたないわ」

識組織の能力だって、本来、戦闘向きではない。識組織の戦闘力は、識組織の戦闘力だ。能力による付加価値は利用するが、基本的に戦闘には向いていないのだ。

というより、能力が戦闘向き、戦闘専用のような能力など、あまりないのではないか。識組織が入学当初戦った『創造』^{クリエイト}だって、本来の使用用途は字面そのまま、創造する能力だ。その中で応用してこそ、戦闘能力を発揮する。

「あ、あの、あたしは、そのっ……」

「私の従順なる下僕よ、識組織くん」

「……はい？」

素っ頓狂な声をあげたのは、もちろん本多識組織少年だ。

高校生同士で、下僕やなんやと言われても、まったくもって要領を得ないだけなのだ。

「……あのお、今、なんと？」

「この娘は、私の従順なる下僕よ、識織くん。だから、先日のごことは私からも礼を言わせてもらっわ。ありがとう、識織くん」

この女は、高校生にして既に下僕を所有しているというのか。

人類史上何度目かになる快挙ではないだろうか、と識織は汗を垂らす。なんだか、こういうことだったら先人の偉人達がやっていそうなおもしたので、少しだけ気弱だった。

「まあ、このお礼云々のことは、後日ゆっくりねっとりさせてもらうとするわ」

「なにをするつもりなのか男子高校生としては激しく気になるというかなんというか」

なんでもなかった。

おほん、と。終夢は本題の本題に入るために咳払いを一つ。しかし、もう空気はあまり締まらない。ふざけ過ぎたという、代償だ。

「まあ、今からの議題は、少しフザケタ感じにぶっとなでいるからあまり畏まらなくてもいいわね」

「その議題とは、ずばりなんですか？」

「私が、レズだということよ」

「……………」

ツッコまない。絶対にだ。

そう、心に堅く誓った識織。

「ああ、間違ったわ。魔術師と超能力者の目的についてだったわ」

……これは、ツッコむべきなのか、悩みどころが多い、ボケかどうか分からない、なにかだった。

第八話：議題その一（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第九話：議題その二

時計の針は既に午後一時三十五分を指しており、いよいよ昼休みも十五分となっていた。識織の当初の望みとなっていた、早く話を終わらせてほしい、というのは、今から本題が始まるとなると、無理な相談らしい。

「これはね、識織くん。本当にぶっ飛んだお話なんだけどね？ 話半分ぐらいに聞いていたらちょうどいいぐらいの、お話だから。だけど、だけど識織くん。これは、私達にとつて、とても切実で、とても身近なお話だから、識織くん。フザケズには、聞いてほしいわね」

との、生徒会長からの長つたらしい前置きを拝聴させていただいた後、識織は言葉通り話半分に受け取るつもりになった。

「魔術師と超能力者の違いって、なんだと思う？」

「その前に、なんで魔術師のことを先輩が知っているのか……っていうツツコミはやめておきますですはい」

話の邪魔をするな、とう言葉がそのまま入念に混ぜられた聖顔で見つめられたので、今回は引き下がることにしたらしい。それを見て終夢は、「よろしい」と満足げに頷く。

「さあ、なんだと思う？」

「……チカラの、使い方とかですか？」

「それも正解かしら。使っている生命力モは一緒だし、まあ、ハズレじゃないわ。けどね、識織くん。そんなことは、小さな区別よ」

終夢が横に控えていた風莉に視線だけを向けると、「風莉、あなたはどうか考える？」と淡々と尋ねた。

彼女はその問いに、少しだけ天井を仰ぎ見てから、答えた。

「……チカラに対する渴望の有無、でしょうか」

「正解よ、よくできたわね。あとでご褒美を上げるわ」

その言葉を聞くと、風莉はこの日一番の笑顔で瞳を輝かせながら、「はいっ！　ありがとうございます！」と答えるのだった。

どうやら、今さっき不覚にも入手してしまった、生徒会長はレズ、という情報には信憑性があり、なおかつそのお相手は一年生の女子生徒だということが分かった識織。人は見た目によらないというか、見た目通りというか、そんな感想だ。

「今ので理解できたかしら、識織くん。魔術師と超能力者の違い」

「ん？　えっと……自分から能力を望んだか望んでいないかの違いですか？」

「そうね。幼稚に言うと、そんな感じだわ」

この女子生徒は、どうやら人をいたぶるのが好きらしい。これもこの後クラスメイトAに教えてあげるべき情報なのだろう。

終夢は、そんなフザケタ（本当に話半分で聞いてもらっていると

は思っていない)想像をしている識織には気付かず、真剣な面持ちのまま話を続けた。

「自ら異形になった者と、事故的に異形になった者。私たちみたいな身持ちの軽い人間にはわからない話だろうけど、その両者には目的があるとされているわ」

終夢は魅惑的な微笑を浮かべると、一本、右手の人差し指を形の整った鼻の前に立てると、まるで試すかのように識織に問うた。

「識織くん。あなた、神様って信じるかしら？」

「……………は？」

「か・み・さ・ま。ゴッド。ディオ。いろいろな呼称があるけど、ここは神でいいわ」

神。世界各地の伝承に登場し、憧れ、尊敬、進行の対象となる存在で、人知を超えた絶対的存在、超々規模の自然現象を擬人化した存在、人外とも呼べる功績を残した人物など、様々な概念に用いられる単語。

世界各地でその信仰状況は違い、唯一性を強調する場合は一神教、多元性を強調する場合は多神教、偏在性を強調する場合汎神論が生まれる。神話的伝承の中で、神は超越的で絶対的な存在であるとともに、人間のような意思を持つとされる。しかし、近代では様々な観点(近代科学の発展、無神論者からの批判)から、そのような神理解は改めるべきだとの意見も現れられている。

「神様って、ゼウスだとか、オーディンだとか、あまてらすおおみかみ天照大神だとかですか？ ああ、あとヤハウェとかも有名ですっけ？ けど、唯一絶

対の神だから、『その名をみだりに口にしてはならない』とかで、二十一世紀の初頭にローマ教皇がなんかお触れを出したとか」

意外と博識な識織。そのことを意外に思ったのか、終夢はおるか風莉ですら、彼女の横で驚きの表情を見せていた。

「へえ。意外と博識なのね、識織くんは。そこまでオカルトに興味があるのかしら。テストでは、学園始まって以来の問題見だとされているのに」

「馬鹿だと言いたいならそう言え！」

「馬鹿」

「言われると傷つくけどすつきり言われた方がなんかいいのは何だろうか……」

「それが俗に言う気分の問題という奴よ。そんなことに疑問を抱くなんて、識織くん、かなりねちっこい性格してるのね」

「……で？ 神様がどうかしたんですか？ 新興宗教のご案内なら、いいですよ」

どうやらこれ以上の掛け合いは冗長になるだけと感じたのか（今までも充分冗長過ぎるのだが）、話を強制的に戻した。

「ふふ。どうやら、識織くんは無神論者のようね？ なにか神様に嫌なことでもされたのかしら？」

「まずはこのトラブルを引きよせる体質をどうにかしてほしいです

ね。こんな体質、神様は俺に死ねと言っているようにしか聞こえませんか」

「でも」

終夢は全てを見透かしたかのような表情で、識織に言う。

「その体質のお陰で、得られたものもあるのでしょうか？」

その通りだった。この体質のお陰、というのは何だか癪に障るので、所為で、自分はそれなりの成長は出来ていると思う。愛知で親におんぶに抱っここの状態に較べると、大分。昔の知人からしてみれば、擦れ違ってもほとんど気付かないぐらい。

その点は、まあ、妥協してもいい所だとは思う。

「何もしないで、何も起こらないで得たものなんて、そんなもの要らないわよ。ゆっくりでもいいから、自分で近づいていつて、ときには巻き込まれながら得たものじゃないと、私は満足できない」

「……そう、ですね」

それは、先日識織もしていた考察だ。

過程も何もすっ飛ばして得たものなんて、正直何の意味も、価値もない。

だが、それはとても御大層なものだが、それを選ぶことが簡単ではないのもまた、事実だ。

「……あら？」

そのとき、生徒会長源終夢は、全校生徒の前では絶対に出さない

ような間抜けな声を、確かに発した。

その視線は、生徒会室に取り付けられている、クラシックな振り子時計に向けられていた。それにしても、流石生徒会室。素人勘定でも、あの時計が価値のあるものだと感じる。

現在時刻、午後一時四十五分。

「……あーあ。どうしてくれるのよ、識織くん。本題に微妙に入って終わっちゃったじゃない。これは私を焦らしているともいうの？　だとしたら、相当な策士ね」

「先輩がボケなかったらすぐ終わりそうだったんですけどね！」

「え？　……ボケ？　あらやだ識織くん。私、ボケなんか言ってないわよ？」

「え？」

「あなたを傷つけるための、毒舌暴言罵言だもの。別にツッコミを入れてもらう必要は」

「ある！　俺の尊厳の為にも十分にある！」

「あなたに尊厳があつたとは、驚きだね。まさか、今日はアルマゲドンでも起るのかしら」

「俺の尊厳の存在は、地球規模の災害を引き起こすとも言つのですか！？」

「うん」

「あっさり肯定しやがった……」

そんなやりとり（主に識織苛め）をしている内に、時間はさらに三分経過していた。昼休み後の清掃場所にいく時間も含めれば、一分一秒も惜しい所だ。そんなところは意外と真面目な、識織少年だった。

「じゃあ、識織くん。今日の放課後、また来て頂戴ね」

「え、それは。俺、バイトあるんで」

それを聞いて、終夢は右手の人差指中指を立てた。

「時給二万円ですわい？」

識織は決して低くは無いらしい生徒会室の天井を見上げ、何か思い至ったように頷くと、ポケットに手を突っ込み、愛用のスマートフォンを取り出し、電話帳からある番号にかけた。

「ああ、店長さん。すみません、俺、今日熱出ちゃって……ああ、はい、大丈夫です。明日には、なんとか——」

金の欲望には逆らえない、平々凡々な高校二年生、本多識織（男）であつた。

第九話：議題その二（後書き）

説明のターンがしばらく続くのかな？

とにかく、自分の中の世界観を、書きださなければ。

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第十話：議論休憩

どんな文明の利器が発達したところで、自分で掃除をするというのは教育上で大事な焦点となる。高校生ともなると、自立一步手前。自活が可能なレベルまでに育成しなければならない。

そのための、清掃時間。

組織の担当場所は、男子便所（空気清浄機完備及び大理石の床、私立の特権）でモップでぴかぴかと光る床を磨く。

その横で、いつもどおりイライラした様子でクラスメイトAが、

「おい本多！ てめえどういう見で俺の生徒会長を」

「まあ話を聞くなよアキラくん」

「言われなくたって聞かねえよ！」

「あ、そう。なら、俺は話さなくていいんだな。ああよかった、楽チンだ」

「……てめえ、嵌めやがったな」

「一本釣り美味しかったです」

「俺はマグロか！」

「アキラくんは自分のことをマグロと称するわけだね。どう考えてもサバレベルの回遊魚なのに」

「回遊魚ですらないしアキラですらない！」

「いいじゃないか、出世魚っぽくて」

「サバは出世魚じゃない。出世魚はスズキだ！」

「コードネームは、アキラ・スズキってね」

「だからアキラじゃねえって言うてんだろぅが！ お前、アキラアキラ言い過ぎてアキラって名前がゲシユタルト崩壊おこしてんじゃねえか」

とまあ、よく声を通るトイレでのボケとツツコミの掛け合いは、五分ほど続いた。識組織だつて普段はツツコミだが、クラスメイトAぐらいの相手ではないと、ボケが出来ないのである。ようするに、ただの憂さ晴らしだ。

掃除時間も残りわずかとなって来たころ、先程までぶんすかと可愛くもないのに怒っていたクラスメイトAが識組織に話を切り出した。

「だめだ。やつぱりどうしても気になる！ なあ、生徒会長とどんな会話してたんだ？ お前に限って色恋沙汰ではないと思うが」

「それ、失礼だぞ。——まあ、アキラくんとするみたいな掛け合いをしてたら、本題に入る前に終わっちまったよ昼休み。今日の放課後、時給二万円でケリをつけた」

「なんだよそれ。お前はもしかしてセレブなお嬢様方にモテる新型だったのか？ お前の性能って実はそこなのか？」

「違うよ。ああ、そう言えばお前マゾだったよな」

「どっから捏造したんだその情報！ 俺は純然たるノーマルだ！」

「自分のこと普通って言うてる奴ほど普通じゃねえんだよ。しかし、だったらお前に生徒会長のお相手はちと荷が重いな。やめとけ。不可説不可説転分の一の確率で恋人になったとしてもだ、お前は毎日のように、いや、正確に毎日毎時間毎分毎秒泣かされ続けるだろう。そして、新しい世界は、存外悪くないところだと思えてくるはずだ」

ちなみに、不可説不可説転とは、非実用的な仏教における大数表示のこと。

アラビア数字の累乗に直すと、10の3721838388197764441306597687849648128乗のことだ。

用いることは無いが、計算も出来ないほど大きな数を示すことで、悟りの高德の大きさを表示することに意味を成したようだ。

「……俺の恋愛成就確率って、悟りを開くことよりも難しいことなのか？」

「残念ながら、……最善の手は尽くしたのですが、やはり」

「そうですね……って、納得できるかボケ！ それに、日常会話のボケの中にそんなコアな大数表示を持ち出してくんじゃねえ！」

「いいじゃないか。また、博識になれたな」

「大学入試でもこれからの生活で役に立たねえような雑学押し込まれても意味ねえんだよ」

「それは聞き捨てならないな。人間ってのは実戦的な勉強よりも大事なものがあるぜ、アキラくん」

「なんだよ、答えてみろよ」

「それは自分で見つけるべきものだ」

「……深、くねえよ!」

「三点リーダー二つ分ぐらいの間で、物事の深い浅いが分かったっていうのか?」

「三点リーダーって何!?!」

これ以上は無意味な争いである。もちろん、識識が一方的にボケまくるのだが。

「まあ、なんだ。また面倒事に巻き込まれそうな気がしてならないんだよ」

「良い方で、今回は面倒事じゃねえかよ」

「どこが?」

「全部だよ」

クラスメイトAは柄がついているたわしで男子便器の淵を擦りながら、言った。

「俺と違って、本多。お前には救いがあるじゃねえかよ」

「……さてね。救いなんてもの、どうせ助かるのは自分だ。自分で自分を助けられない限り、いつまでたっても救いなんて訪れないさ」

男子トイレに、重苦しい空気が流れる。いるだけで息苦しくなるような、ある種、毒を孕んだ空気がどこからか流出しているのかと思っぐらい、重苦しい空気が、二人の間に流れる。

識織もクラスメイトAも、どちらも相手の出方を窺っているようで、黙々と清掃に勤しんでいた。

しかし、片や追い詰められたかのような表情。片や行き詰ったかのような表情。

どちらも似ているようで、そこには明確な違いがあった。

思い至ったような顔になった識織は、モップで床を磨きながら、口を開いた。

「まあ、なんだい。アキラくん。重い空気を流れさせるなら、もうちよっと場所考えようぜ」

「……違うない」

ふっ、と。

張り詰めていた糸はとうとう切れ、ゆっくりとたわんでいった。

第十話：議論休憩（後書き）

今回は休憩タイム……なのに、女の子どころか男の娘すら出てこないありさま。

ご感想・ご批判・ご指摘、お待ちしております。

第十一話：議題その三

夕方の生徒会室というのは、とても不思議な場所だ。いや、生徒会室に限らず、斜陽が差し込む密閉空間というのは、幻想的な空間へと変貌する。

そこに、本多識織と、源終夢、白船風莉の三人が揃っていた。

この学校には他には生徒会役員がいないのだろうかというほどに、生徒会長の存在感は抜群だ。

「いらつしゃい、識織くん。そろそろ夏の甲子園の予選で、全校で応援に行くのだけれど、その会議が少しもたついちゃってね。待たせてすまなかったわ」

全国でも化物のような身体能力を持つ高校生がごろごろいる明蘭学園。文武両道がモットーの学校。勉強が出来ない奴は、したがってあり得ないぐらい高性能な身体を保有している。運動が出来ない奴はまた、あり得ないぐらい高性能な頭脳を保有している。

特に、というわけではないが、野球のような広い場所で行われる大会では、大体的場合全校生徒で応援に行くことになる。

そこで、生徒の自主性を重んじる明蘭学園では、その行事の業務を生徒会にほとんど任せている。投げっぱなしである。

その、平常時の行事なども合わせて多大な業務を行っている中、そこに時間的余裕を創るのは至難の業だ。

そういう点においては、この生徒会長は人外の働きを見せている

と言っても過言ではない。

「いいですよ。別に、帰ってもなににもすることなくなりましたし」

「ふふ。優しいのね、識織くん」

「そうでもないですよ。俺は、結構厳しい奴です」

「ふうん。一年生のときからそんな感じね、あなたは。ツンデレ、っていうのかしら。男のツンデレは見たもんじゃないって副会長の篠崎くんが言ってたけど、案外、そるものがあるじゃない」

弓のように眼を弧にして微笑む終夢。

背筋になにかが奔る識織。

まるで、蛇に睨まれた蛙のように、呼吸すらも一時的に止まってしまった。それほどの魔性が、あの微笑みにはあった。

……存外、自分もマゾっ気があるのかもしれないな、と認識を改める識織だった。

けれどもそれは、この女性に対してだけのようだ。

ノーマルだった男にマゾっ気を感じさせるとは、サディストのハイエンドのような女だ。

「まあ、ツンデレでは決していないけどな……で？先輩、昼間の話の続きとやらをじっくりしましょうよ」

「あら、随分と乗り気なのね？本当は逃走するかと思って、いろいろと罠を仕掛けておいたのだけれど」

「罠!?!」

「嘘よ。これ以上冗長にしても、またお昼休みの繰り返しだから、遠慮させてもらっわ」

「え、いや、はい……」

さて、またいつちようツツコミの嵐が始まりますよ！　といきこんだところで、出鼻をくじかれた識織。走りだした瞬間に足を引っ掛けられて、転んだ先がゴキブリホイホイの粘着シートだった感じだ。

「昼の続き、あらすじとか言ってほしい？」

「いえ、憶えてるんで」

「そ。なら、議論に移りましょうか」

オレンジ色の夕日に照らされて、目元に深い影が差していてその表情ははつきりとは分からなかったが、微笑んでいることだけは確かだった。

「神様っていうのは、どのくらいいると思う？」

「どのくらいって……日本だけでも、数えるのが馬鹿らしくなくらいいるじゃないですか……あえて言うなら、たくさんってところでしょ」

八百万の神。ギリシア神話の神々。北欧神話の神々。エジプト神話の神々。アステカ神話の神々。中国の神々。道教の神々。ローマ

神話の神々。マヤ神話の神々。その他数々の神話に登場する神と、宗教において主とする神。少数部族の神なんてのも含めると、それだけで一日経ってしまう。

一神教信者とは、論を相反することになるだろうが、それもすなわち事実だ。

人の数だけ思いがあるように——人の数だけ神がいる。

「正解はね、識織くん。一柱よ」

「……？ 一柱っていうと、ひとりってことですか？」

神の数え方として、柱が挙げられるだろう。

しかし、この場合、この巨大な宇宙を、たった一本の柱が支えているとも言うのだろうか？

だとしたら、それは、とても危ういバランスの下に成り立っている。そう。地球の環境と大して変り無いではないか。

「……なんだから、多神教信者の方々が、泣きそうな言葉ですね。ゼウスも涙目です」

「ああ、勘違いしないで、識織くん。私が言っているのは、『げんてん源点』のことだから」

「『源点』？」

「そう、『源点』」

原、ではなく、源。

全ての始まり。全ての起り。

「アカシックレコードとか言わないでしょうね、先輩」

「私、フザケズに聞いてほしいって、言っただわよね？」

いきなり、上等な材質の机の中央が陥没する。

ぱらぱらと、粉のように舞う木屑の向こう側で、生徒会長源終夢『波動』の使い手は、本日何度目かになる微笑みを呈していた。

「サーイエッサー！」

識織は椅子から立ち上がり、思わず敬礼をする。

「よろしい」

これ以上フザケルのは、命の危険を感じた識織。敬礼をしたまま椅子に着席し、まだ終夢が笑っている（精神的に）のを見て、敬礼を解いた。

「『源点』というのは、つまり、全ての始まりよ」

「けど、それって、カオスとかじゃなかったですっけ？ 何も無い空隙くうげきがどーたらこーたらで、そこから原初の神々が生まれたとかどうとか」

そういうオカルトに対して無類の知識を誇る識織。こういう知識は、中学二年生時に溜めておくのが基礎である。それを、所謂中二病と言っらしい。

識織が不思議そうに首を傾いでいると、終夢はおかしそうに笑う。

「識織くん、神様のことあまり信じていないのに、そういう知識ばかりあるのね。けどね、識織くん。無から有が生まれるわけなんてないじゃない」

「……まあ、そこは宗教とか信仰のウルトラエナジーでどうにかなってるんじゃない……いえ、すみませんフザケました」

「もう。次フザケたら、七十億の下僕があなたを殺しに行くから、覚悟なさい」

「世界人口!？」

驚きだった。

まさか、赤子にまで殺されてしまうような恨みを買ってしまうなんて。

「神を創ったのは人間だ、なんて、夢の無いことを言う人間じゃないわよね？」

「……じゃあ、誰なんですか」

それを言おうとした途端に忠告されてしまって、少しだけ不機嫌になってしまう識織。そんな彼を見てくすくす笑うと、「それはね？」と言葉を紡いだ。

「それが『源点』。全ての根源よ」

凜っ！　と言いつ放たれてしまった識織。

よつするに、世間一般的に知られる神々を創ったのは、その『源点』とやららしい。

「……宗教臭くなってきやがった」

「『源点』は全ての真理という真理を孕んでいる存在だけど、それを出力する装置が無いの。それを一つの出力装置に任せずに、多数の出力端子でその力を発揮しているのよ。ようするに、『源点』はソフトで、『神々』はハードってところね」

それは随分と高性能なソフトですね、と呆れたように識織。
あたりまえよ、と恥ずかしげもなく終夢。
未だ出番がありません、と心の中で風莉。

「で？ その『源点』とやらが、魔術師と超能力者の目的とやらにどう関係してくるんですか？」

本題はそこだったはずだ。

魔術師には魔術師の、超能力者には超能力者の目的。まずは、魔術師と超能力者の本質的な違いから始まって、果てにはこんな宗教染みたぶっ飛んだお話になってきた。

もしかしたら、これは先輩のお茶目心か？ と若干疑い始めた識織。

声に苛立ちが混じってしまっていたのは、その所為だろう。

「ふふ、若いわねえ識織くん。けど、余力は来るべきときに取っておくべきものよ」

（来たるべきときっていつだよ！）

今である。

終夢もこれ以上からかうのには引け目を感じるのか、おほん、と

話を戻す為の咳払いを一つ。

「『源点』そのものが、どちらにとっても、ラストアティメントパーパス最終到達目的よ」

「……でも、それって」

矛盾してませんか、昼言ったことと、と識織が首を傾ぐ。

終夢は『それぞれ』の目的があると言った。だが、これではどちらもどちらで同じ目的である。

彼女は、それでも不敵に笑う。

「話を最後まで聞きなさい。——そこに到達するという目的自体は同じだけど、そこからは違うわ。ここで、昼休みに張っておいた伏線が役に立つのだけれど」

「伏線とか言わないでください！　なんだか不安になるから！」

「黙りなさい」

「……はい」

問答無用だった。

とにかく、その伏線とやらがなんなのかは、識織には思い出せなかった。うんうんとうなりながら首を傾けていると、終夢が、「いいわ、もう一回だけ教えてあげる」と救いの手を差し伸べた。

「さて、なんだったかしら、風莉」

ここでやっと話しに入れてもらえた白船風莉女史は、ぱあっ！と明るい顔になると、「はい！」と元気よく答える。

「チカラに対する渴望の有無です！」

「よくできたわね、偉いわ」

夕日に煌めく金の髪を優しげに微笑みながら撫でる終夢。それに対して頬を真っ赤に染めながら、「えへ、えへへ」と笑いが零れる風莉。

微笑ましい風景のはずなのに、昼間のレズ発言によって、邪な感じに見えてしまうのは気のせいだろうか。だとしたら、終夢の微笑みが扇情的に見えるのも、きっと気のせいだろう。

識織は、精神衛生上よろしくない光景を一分ほどまざまざと見せつけられてしまった。

じつと二人を睨んでいると、そのことに気付いたのか風莉が気まぐげに、「あ、あのう」と終夢に提言した。

「ああ、悪かったわね識織くん。つい、やっちゃうところだったわ」

「せめて俺がいない場所ですでください！ 哀しくなるだけだから！」

「冗談よ」

悪戯っぽく笑う終夢と、恥ずかしそうにハニカム風莉。

……ああ、ダメだこいつら、とは識織の心の言。

「じゃあ、識織くん。話を戻すんだけど——もしも、よ？ もし、誰かから勝手に銃を渡されたとしたら、どうする？」

「……混乱しますかね」

「そんな優等生の回答を望んでるわけじゃないわ。もっと、感情的になって」

識織は、考える。

銃を渡されたからと言って、べつに、と言った感じた。そこで一般的思考に則って考えたとなると、『怒り』が混乱の次くらいに来るだろうか。

「キレますね。なんでこんなモン渡してくんだよ、って」

「じゃあ、手榴弾だったら？」

「……………」

それは、別格の問題ではないだろうか。

銃は、別に所有しているだけでは大して興奮もしないだろう。引き金を引きさえしなければ、至って安全な代物だから。

だが、手榴弾は違う。

もし、手が滑ったら。

もし、誤って安全ピンを抜いてしまえば。

緊張。興奮。焦燥。

それらのものが入り混じって、混乱というより、むしろ狂乱状態に陥る。

それに、銃とは違って、その破壊の対象の規模が無差別だ。無差別に広範囲だ。

与える被害なんてものは、比じゃない。

「……同じく、キレますね」

「じゃあ、それが大陸間弾道ミサイルの発射装置だったら？」

「……それ以上に、キレるか？」

「じゃあ、それが核ミサイルの起爆装置だったらどうかしら？」

「……………」

識識には、その質問に答えることすらできなかった。

だが、この女が何を言わんとしているのかだけは、理解が出来た。たとえば、銃、たとえば、手榴弾。たとえば、大陸間弾道ミサイル。たとえば、核ミサイル。

そして――、

「じゃあ、それが『チカラ異能』だったら、どう？」

――試すように、そう言った。

第十一話：議題その三（後書き）

みなさんならどうしますか？

欲しくもない、望んでもいない、恐ろしいものを与えられてしまったとき。

みなさんなら、どうするでしょう？

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十二話：議題その終

「識織くん。どうかしら？」

時間が、全ての時間が止まってしまったかのように静止していた識織に対して、返答を促す終夢。

あまりにも、衝撃的というか鮮烈な質問。

強引に、与えられた。

それならば、どうするのか。

「——普通ですよ。俺は、いろいろ折り合いをつけて、ちゃんと生きてますし」

「そうね、私もだし、風莉もね。『創造』^{クリエイト}は、一時期荒れてたけど、今はそうでもないみたいだし、この学園は今のところ大丈夫よ」

いや、『創造』^{クリエイト}が荒れていたのは、そんな理由ではない。というより、荒れていた、なんてものではなかった。

全てを一から創りだす能力。まるで、創造神かのように、次々とこの世界にある物から無い物まで、全てを創りだしていた。

終夢は、回想に耽っていた識織を呼び戻すために、おほん、と咳払いを一つ。

視点の焦点を、頭の中から向かい合って座っている終夢に向け直す。

「けどね、あなたや私たちのような人間だけじゃないのよ。耐えき

れなくなつて、自壊する人だっている。周りに災害を振り撒く人だっている。——そして、見当違いの復讐を誓う人だっているわ」

「復讐？」

「そう、その『源点』にね」

『源点』。全ての起源、全ての根源。始まりから終わりまで、全てを生み出した絶対的な何か。

「それが、超能力者の目的。『源点』を殺し尽くすことよ」

「……でも、俺は」

識織は、『真理の明眼』を開眼した時のことを思い出す。

たしかに、最初は超能力という存在に戸惑いはしたが、その時の状況が状況だっただけに、流れ流れになっていた。使い方を誤って危つく空気に押しつぶされそうになったこともあった。

だが、この存在を疎んだことなど、ない。

「ええ、わかつてるわ。私が挙げたのは、あくまでも一部の超能力者のことだから」

「……先輩は、そんな人に会ったことがあるんですか？」

「あるわ。死んでいるかのごとく生きている、とは言いで得て妙。まるで、生きることが生きる目的なんかじゃないかのように、なにかを探してたわ」

終夢の表情が、初めて曇る。

見たことを後悔しているのか、それとも思い出して後悔しているのか。どちらにせよ、後の祭りだ。

「まあ、いいわ。次に魔術師の目的なんだけど、こっちは単純明快。人の欲望が如実に表れているわ」

いつまでも曇っているわけにはいかず、しかし咳払いをする気にもなれず、溜め息で雲を流す終夢。

「あと、今から言うことは、今回の連続自殺事件の黒幕のことも当てはまるから」

さらっと、今回の一連の事件の黒幕がどのような奴か予言してみせる終夢。

だがしかし、彼女からはやる気が既に消え失せていた。どうやら、昔のことを思い出した際に、全て持って行かれたみたいだ。それでも、彼女が呼んだのだから最後までやる気をもたせてほしいものだ。

「『源点』には、その全ての真理を孕んでいるという性質上、そこに辿りつけば、『何が難でも』やりたいようにできると考えられているわ」

「……じゃあ、今回の黒幕には何か叶えたいことが在って、それは普通では絶対に叶えられないものだから、その『源点』とやらに辿りつく方法を探してるっていうんですか？」

「そのために、魔術師としての力を手に入れた。だから、危険なものには変わりないわね」

ようするに、魔術師や超能力者というのは、究極の自己中という

わけだ。

自分の目的を叶えるためになら、どんな方法も辞さないし、その過程でどんな犠牲が出ようと構わない。超利己主義な、人間。

「最終的にね？ 何が言いたいかと言つと」

終夢は、変わらず真剣なまなざしを識織へ向ける。

「とくに、気をつけなさい」

夕日もほとんど落ち、薄暗い光が仄かに差し込む生徒会室で、生徒会長源終夢は、そう言った。

第十二話：議題その終（後書き）

短めですね。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十三話：魔術師『折神式』（前書き）

今回は戦闘です。

いやあ、指が乗ってしまい長くなってしまいましたw

第十三話：魔術師『折神式』

すっかり宵の闇に包まれてしまった道路を、自転車をこぎながら進んでいく識織。

その顔は、——すっかりにやついてた。

「二万かー。時給二万、ふっひっひ」

あのあと、議論が終わり、「はいこれ」と終夢から渡された封筒の中には、たしかに福沢諭吉さんが二人鎮座しておられた。ここまですで、福沢諭吉を尊敬したことはない。

それにしても、あの女。高校生の身にして、いや、人間である身で、二万円をあそこまで軽々と渡せる精神、どこから来るのだろうか。

「もしや、生徒会長は御令嬢説は、本当だったのか？」

それは、生徒会長七不思議のひとつ、『ありえない投資』に基づくものだ。

懷から、福沢諭吉が百人出てきたとか、学校の迎えにリムジンがやってくるだとか、そんなフザケタ噂なのだが、今回のことで少し信憑性が高まった。

まあ、そんなこんなで、通りの角を曲がると——黒ずくめの格好をした、壮年の男が道路のと真ん中に突っ立っていた。

識織は不思議に思い、思わずペダルを漕ぐのをやめて、ブレーキをかけた。ゴムが擦れる甲高い音が閑静な通りに響き渡った。

彼は、少し離れたところから男の様子を窺った。それだけでも通常時であれば無礼極まりない行為なのだが、今は非常時なのかもしれない。

「本多識織か」

よく通る、男声だった。低音で、男としては懂れるような、そんな声。

その壮年の男は、この時期にはあまり珍しくない、黒いコートで全身を覆っている。

そして、少し経って、識織は自分がその男に呼ばれたことに気がついた。識織はやつとのこと、このままでは失礼かと思い、自転車から降りて、「はい、そうですけど」と答えた。

「……そうか。安心した」

壮年の男は、懷に手を入れ、何かを探り始める。その所作自体は普通で、冷静な印象を受ける。が、異常性を感じさせる。

「『真理の明眼』、だったか？ 貰い受けよう」

「ッ！？」

識織は驚愕よりも先に、右腕を一定の速度で振り、仕込んでおいたナイフを構える。鈍い色の金属光沢が、銀色の月明かりに照らされて、ぎらりと光る。

今、この男は『真理の明眼』だと言った。誰にも、いや、名前だけならいくらかの人間は知っているが、それ以外の人間は知らない

はずだ。教えた人間や、知っている人間を含めて、脅されたからといってそうそう情報を漏らすような人間ではないから。

「折神式」

懐から出したのは、黒い折り紙で折られた、四足獣のようなもの。しかしそれは、手の平サイズのもので、決して人に害を与えることが出来るようなものではない。

本来ならば、だが。

識織は間髪いれず『真理の明眼』を開眼。両瞳が血のように紅く染まり、動くたびに残光の帯を引いていく。ナイフを逆手に持ち替え、威嚇するように男に向けた。

「あんた、誰だ」

「八重継真^{やえ つぐま}。『源点』を求める者だ」

「……魔術師か」

『真理の明眼』が、薄暗い闇に干渉し、識織だけには幾分か明るく見渡せる。

だが、その眼をもつてしても、男のなんたるかが理解できない。

『真理の明眼』の特徴として、複雑であればあるほど、『解析』にかかる時間は長くなり、眼に対する疲労度も上がってしまう。

（なんだ？ こいつ……本当に、ヒトか？）

人とは、複雑なようで単純で、単純なようで複雑な生物だ。複雑な紐を解くように理解しようとすれば余計な手間がかかり、単純な紐を解くように理解しようとすれば難解なパズルを解くより難しく

なる。

だが、時間をかければ、理解できるはずだ。

どんなに難しいパズルでも、コツを掴んでしまえばあっという間に解けてしまうように、人間だって同じことのはずだ。

しかし、この男は違った。

掴みかけてはするりと逃れていく。そう、まるで答えが連続して変わって行くかのように。

(……真理が、ない?)

「さて、本多識織。その両瞳、私が貰い受けよう」

壮年の男——八重継真は、いくつかの四足獣を模した折り紙を、宙へと放り投げた。

そして、識織は見た。

その折り紙の表面に記された、膨大な量の情報を。見たこともないような形で書かれた、不可思議な文字の羅列。

それが、紅く浮かび上がり、膨張した。

「……生徒会長殿が言ってたことは、大当たり、ってか?」

『とくに、気をつけなさい』と。

生き物のように蠢きながら膨張した黒い折り紙は、どこかで見たことのある、黒い狼三頭へと、姿どころか存在を変質させていた。

「我が宿願、果たさせてもらおう」

その言葉に対して、識織は、冷や汗を垂らすしかなかった。

超能力者とは、神に近い能力の片鱗を、渴望の有無に関わらず押し付けられた人間のことだ。故に、能力を超えた者と呼ばれる。運動能力でもない。思考能力でもない。

現代科学で顕せる全ての能力の中に入っていない能力のことだ。

押し付けられた理由など知ることすら出来ず、ただただ爆弾を抱えさせられた人たち。

耐える者。

憤慨する者。

復讐を誓う者。

折り合いをつける者。

生き方は様々だ。

しかし、最近になってわかってきたこと——否、気付かれてきたことと言すべきか。

超能力者から『源点』に通じているのではないかと。

神に近い能力は、一体誰から押し付けられたのだろうか、と。全てには原点がある。何の脈絡も無しに起こる事象など一遍たりとも在りはしない。

『源点』

そう考えるのは、不自然なことではなかった。

故に今、魔術師と超能力者の間で、小さないざこざが起きている。そして、今。四月十日午後十時三十分。

とある魔術師と、とある超能力者の間で、抗争が起る。

「ツツガア！！」

三頭の巨狼が一直線に進んでくる。

体積的にも真正面から迎え撃つのは愚策と感じたのか、識織は迎え撃つことなく柳のように身体をしならせ、間をすり抜けた。

様子見、と言うのが正しいだろう。

この様子だと、八重と名乗った男はまだまだあの折り紙を出してくる。この三頭を葬ったとしても、次から次へと出してくるに違いない。そうなれば、消耗戦になってしまう。

相手の戦力が分からない以上、不用意な体力消費は馬鹿のやることだ。

そうこう考えている内に、巨狼たちがまた識織に襲いかかる。次はタイミングをずらした三連続攻撃。

次は迎撃に転じる。

長く付き合ってやるほど、識織の気は長くない。

この三頭を一気に消し、切り刻み、次の式神とやらを八重が出す前に、擦じ伏せる。

迫りくる三頭に対し、識織はぐつと身体を沈みこませる。吐息が、冷たく冷え切ったアスファルトを柔らかく撫でるのを感じた。

体は鬼。

心は人。

鬼人となりて、敵を討つ。

紅い残光が帯を引く。動きを現わすのは、ただそれだけ。
瞬間。

縦横無尽に駆け巡った紅い残光が、三頭の巨狼を引き裂いた。生理的に嫌悪を感じるような白いモヤを残し、三頭の巨狼はその姿を散らせた。

間髪入れず、識織は反転する。地面に足をつき、加速するベクトルを無理に変え、膝が嫌な悲鳴を上げる。

髪が寒々しい風を浴び、猛然となびく。

振り向いたその先に、八重と名乗った男がいた。

再び、三頭の巨狼を顕現させた状態の。

「クソッ！」

誤算だった。最初、あの式神を顕現させる時間は、たしかに五秒はあったはずだ。しかし、今のタイムは一秒にも満たない。

こうなれば、態々バケモノの相手をしてやる必要が無くなった。

識織は額に汗を滲ませながら、再度猛進してくる三頭の巨狼にナイフの刃を向けると、今度はこちらからも突進した。

黒いアスファルトを踏みしめる足が、やけに重く感じる。

最初に衝突した巨狼の鋭い噛みつきを、体を沈みこませることにより回避。次に押し寄せてきた前肢による殴打を前転宙返りでなんとか避けた。

「ガア！」

三メートルを超す巨体が正面から突っ込んでくる。しかし、その巨体ゆえに隙間も多い。

識織は、その四肢の間をすり抜けるようにして、前へと進んだ。

巨狼三頭の攻撃をすり抜けた先に待っているのは、がら空きの操縦者。何事にも、根源は存在する。ならば、それを叩き潰してやれば、もしくは奪ってしまえば、それに操られていた事象は停止する。識織は十メートルの距離を一秒で詰める。驚異的なバネを活かした加速に、八重の表情は驚きに曇る。

「終わりだ、元凶！」

「グッ!?」

八重の足を払いのけ、宙に放りだされた腕をとり、そのまま地面に組み伏せる。閑静な通りに、あまり耳にすることは無い肉を打つ音が生々しく響いた。

うつ伏せに組み伏した八重の首筋に、大型のナイフの刃を突きつけた。

「……動くな」

鈍色の刃が、銀色の月明かりに照らされる。その金属光沢が八重の目にも、識織の眼にも入った。

しかし、それでも八重の余裕を持った顔は崩れず、それを『真理の明眼』でも理解することが出来ない識織には焦りの表情が出ていた。

物理的には優勢だが、精神的には劣勢。

「何を以って動くなと？」

「気をつけるよ。このナイフ、人を斬ろうと思えば何の抵抗感も無しに切れる業物だから、気をつけるよ」

事実を言っている。それなのに、識織は自分で言った言葉なのに、虚勢にしか聞こえなかった。心理的に劣っている部分を、なんとかして言葉で埋めようとしているようにしか、聞こえなかったのだ。そんな識織の心情を知ってか知らずか、八重は不敵に笑う。

「そのナイフが、どうしたというのか。それでは、私にまるで届かぬぞ？」

「……試してみるか？」

「やってみるがいい。本多の血を継ぐ者よ」

「ッ!？」

それは、反射的だった。

曖昧にしか入れていなかった力を、持てる全力へと変えて、識織は首筋に当てていたナイフを押しこんだ。

ほとんど抵抗は無く、豆腐を斬るというより、素振りをするかのような感覚だった。

すんと、と。八重の首が転がる。後ろで三頭の巨狼が消え去るのを感じた。

——出血が無い、と気付いた。

「さて、本多識織。何を以って私に動くなと命じた？」

後ろから。よく通る、男としては若干羨ましいような低音の男声が、閑静な通りに響いた。

そこで、理解した。

『真理の明眼』を以ってして、識織が八重の真理をまるで掴めなかった理由。

転がった八重の首が、生理的に嫌悪を感じる白いモヤを噴き出し、消滅した。

識織は、人間として、目の前にいた八重継真という男を見ていた。それは、一種の洗脳に近いだろう。人の、それも識織特有の思い込みを利用した、心理的トリック。

組み伏せていた、首を失った頑強な体も、白いモヤを噴き出し消失した。手にあった人の感触が、まるで嘘のように失われた。

——人ではなかった。

「お前の誤算は、私が巨狼——天狼しか使役出来ぬと思ったことだ。私は、神に仇なす存在全てを式神として顕現させることが出来る」

識織はゆっくりと立ち上がり、『八重継真』という存在を見つめる。三十メートル以上離れた道路の中央に、懽然とした態度で、最初に会った時と同じように突っ立っていた。

しかし、これが『本物の八重継真』という確証はどこにもない。否、『八重継真』という姓名すら本物かどうかなど、識織にはわからない。

『真理の明眼』を使用しているにも関わらず、だ。

「日本神話などを紐解けば、誰でも知っている八岐大蛇やまたのおろちに始まり、人は神を殺している。私は、その伝承を元に魔術を使っているだけだ。ふん。まさか、神を殺す力が人に向かうとは、皮肉なものだな」

問題は無い。識織は自分にそう言い聞かせる。式神とやらの耐久値はほぼゼロに近い。こちらから攻撃を当てればすぐに壊れてしま

う。

だから、問題無い。そう言い聞かせた。
識織は、八重との正中線にナイフを構える。

「あんだ、なんで俺を最初から狙わずに、他の奴らに手出してんだよ」

「最初からお前を狙っていたわけではない。超能力者ならば、見つけ次第狩っている」

「狩るって、あんだ……」

「超能力者は、『源点』と最も密接な人間だ。誰よりも『源点』を憎んでいる人間が、誰よりも『源点』を望んでいる人間よりも近いとは、皮肉なものだ」

「俺は、憎んでなんかない」

識織は言う。

この『真理の明眼』を得られたことは、最終的にプラスに繋がっている。

「ふん、関係の無い話した。普通の超能力者では、『源点』に辿りつく前に回路が焼き切れてしまう。次元の違う存在^{ソフト}を出力させるには、それなりのハードが必要なのだよ」

「それが、ようやく見つけた俺ってことかよ」

また、面倒事に巻き込まれた、と。識織は汗が冷える前に拭いながら溜め息をついた。

識織がそう答えると、八重は悪魔のような笑みを浮かべる。眼光が、曇って見えた。

「そつだ、本多識織。だが、若干違つな」

八重は右の人差し指と中指を識織に向ける。鋭い刃を向けられたように、彼の体は竦んだ。

「お前の両瞳さえもらえれば、本多識織、お前の命はとらないでおこつ」

「……………」

識織は、無言で答える。

正中線に構えた鈍色のナイフを逆手に持ち替え、突貫の体勢をとる。

「やはりか。本多家の鬼子は、戦闘狂のようだ」

「俺は、平和主義だ!!」

三十メートルの距離を詰めるべく、識織は黒いアスファルトの上を駆けた。

その途中で八重は懷に手をつ込み、三つの折り紙を取り出す。あの小さな媒体には、いや、あの情報など詰め込む要素などほとんどないような紙切れが形を成したものに、そこいらの生物以上の情報量が詰め込まれていた。

紅い文字が膨張し、一気に文字の羅列が確かな情報へと変わって行く。

再び三頭の巨狼が出現する。

識織はそれを見ても、足を止めずに八重のもとに突貫し続ける。

『グルア！』

一頭目の巨狼が唸り声を上げながら襲いかかってくる。だが、相手が攻撃モーションに入る前に一気に加速し、巨狼の巨大な頭蓋骨を毛ごと掴み、その首筋を識織のナイフが切り裂く。

たしかに肉を切り裂く感覚はあったが、それはふっと消え去ってしまう。体高三メートル以上の巨体が消え、不意に足場を失った識織だったが、猫のように身を翻させ上手く着地する。

しかし、他二頭が既に展開していた。

左右から襲いかかる二つの巨体。腕と牙。二つの凶器が識織めがけて放たれる。

大きく振られた腕を、ほぼ紙一重とも言えるような危うさで避ける。空を切った巨狼の腕がアスファルトに衝突し、礫を飛び散らせる。

そこに獰猛な牙が識織の頭部を噛み砕かんとする。それを体を大きく反らせ、弓なりに曲がり避けたところで、巨狼の頸動脈を掻き切った。

しかし、その弓なりに曲がった体に、先程避けた腕が再度振るわれる。

体勢が体勢だけに、ナイフでガードするしかなかった。

アスファルトを砕いた腕の一撃が、ナイフに激突し、識織を地面に叩きつける。

「ぐッフ!?」

思わず呻き声が漏れだした。肺の中の空気が排出され、得体のしれない痛みが全身を覆った。

そこに、獰猛な牙が襲いかかる。

『ガアッ!』

「くそッ!」

押さえつけられている巨狼の腕をナイフで滑らせ、命からがら抜け出した。そこへ、先程の恐ろしいまでに鋭利な牙が喰らい付いた。ずぶり、と。腕に一センチほど牙が刺さったところで、右手に握ったナイフが巨狼の頭部を真つ二つに両断した。三頭の巨狼の身体から白いモヤが噴き出す。

「はっ、はっ、はっ!」

先ほどよりも、機動性や攻撃力が上がっている気がした。多分、それは気のせいではないだろう。

「そら、何を休んでいる?」

再び折り紙が宙へと放られ、また三頭の巨狼へと姿を変える。織織は溜め息を漏らす暇もなく、紅い残光の帯を引きながらその渦中へと突っ込んでいく。

ナイフと両眼に全ての神経を集中させる。

三頭の巨狼の間をすり抜けながら、いかにして最短の道を突き進むのかを見極める。

在りもしない線が奔るのを見た。

——いける。

鹿が地面を蹴るようにカカツ、と乾いた音を上げながらその三頭と衝突する。

一頭目の強靱な顎を使った噛みつきを、左手を使った掌底で強引

に閉じ、逆手に持ったナイフでその喉元を掻き切る。

噴き出したモヤが識織の身体を覆い隠した。

そのことに、残り二頭の巨狼の動きが鈍る。しかし、状況判断能力は先日的一件ですでに実証されている通り、随分と高い。二頭の巨狼は一時の硬直から解かれ、モヤの中心に攻撃を仕掛ける。

が、何もいない。

「相変わらず、不思議な気分だ！」

空を駆ける、という表現が最も正しく、そのままの在り方だった。識織は、何もない虚空を駆け、男の元に殺到していた。

空気という存在の真理を掴み、干涉する。範囲指定を行うことにより、自分が踏みつけた場所の分子を空気中に固定させることで、虚空を闊歩することが出来る。

二頭の巨狼の頭上を走り去り、識織は八重に凄まじいスピードで迫っていた。

（奴の式神を展開させる速度は一頭あたり〇・五秒程度。……今から展開されたとしても、一頭だけだ。……いける）

識織は今までの様子見から鑑みるに、相手の最大数は三頭と見切った。

額の汗が、通り過ぎていく風に冷え、乾いていく。

——これで、終わり。

しかし、八重は自分が窮地に立たされているのにもかわらず、識織の突貫をあえて許しているかのような余裕の表情を見せていた。

（……待てよ？ こいつが、連続自殺事件の首謀者ってんなら……マズイ！？）

気付いた時には、既にどちらも射程範囲内。

「甘いな、本多識織」

鈍色の刃が八重の首に届く前に、それは起った。

八重の身体が内から膨張し、全身の骨格が不自然に歪んだかと思うと、またも白いモヤを残し爆散した。

——その中に、一目見ただけで、百はあろうかと言うほどの折り紙が混入されていた。

膨大な量の情報が『真理の明眼』に流れ込み、嫌な疲労感が両眼に蓄積するのを感じながら、識織はたしかに折り紙が膨張し、形を成していくのを目撃した。

瞬間。

百を超える無数の獰猛な顎が、あぎし識織の身体に殺到した。

全身からどろりとした鉄臭い液体が噴き出すのを感じながら、識織は意識が消え去るのを明確に感じ取った。

第十三話：魔術師『折神式』（後書き）

あ、そういえば、この作品、主人公最強じゃないです。
まあ、タグにないのでお気づきだと思いますが。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十四話：狐面の少女

百をも超える巨狼の強靱な顎に喰いつかれ、どろりとした紅い液体を体中から垂れ流している識織。血液を失い過ぎたのか、はたまたあまりの激痛で身体が自然に反応しているのか、どちらにせよショック症状を起こし、時折身体を跳ねさせていた。

だが、それだけだ。

陸に打ち上げられた魚のように、びくびくと身体を跳ねさせ、浅く胸を上下させるだけ。

「失」

どこからともなく現れた八重は、よく通る声で式神たちに命令を送った。すると、四肢以外の部分に噛みついていた巨狼が消え去り、四頭のみが残った。

静けさを取り戻した、閑静な通りに、こつっこつと、乾いた靴の足音が響いた。

「ふん。最後の最後に気付いたようだが、それならば気付かなかった方がよかつたな。絶望的な数字など」

八重は、乾いた音を立てながら、識織に近づく。
手には、不可思議な形をした文字が刻まれた、黒い手袋が着けられている。

指を握りしめ、その手袋の調子を確認する。

「このままでは、『真理の明眼』も腐敗しかねんからな。その両瞳、貰い受けるぞ」

四頭の巨狼が識織の身体を抑えつけている中、その中でほぼ無傷な状態の頭部。その傍らに、八重はゆつくりと中腰になった。

ゆつくりと、八重の重厚な手が、識織の閉じられた瞼に向かう。

ゆつくりと、ゆつくりと、ゆつくりと——確実に。

しばらくの静寂が続き、そして——ぐちゃり、と水気のある音が、鳴った。

八重は、自らの右手を見やる。

——否、元自分の右手を。

「なッ!？」

八重は手首から先が切り落とされた自分の腕を、半ば呆然とした様子で驚きの声を上げた。噴き出る血液に顔を顰めながら。そして、いつの間にか、識織の四肢に噛みついていた巨狼の首が切り落とされていることに気付き、顔を顰めながら。

伸ばした手の先には——狐面和装の、何かがいた。

「ちッ!」

黒ずくめの男に、一部の赤が纏わりつく。まずは状況を整理しよう。と、八重は転がっている右手を広い、バックステップでその狐面和装の何かから距離を取った。

追撃は仕掛けて来ない。

八重は痛む消え去った右手首を押さえながら、その狐面和装の何かを観察する。

（体つきからして——女。武器は、脇差か）

脇差といつても、お飾りの脇差などではない。濡れたような刃、その風格。そこら辺の日本刀の数倍の品格を感じるそれは、狐面和装の少女の左手に握られていた。

——圧力は、標的であつたはずの本多識織の数倍。手首が落ちるまで斬られたことに気付けなかったほどの腕前。

「……そうか。お前が、鬼子の……ここは、退かせてもらおう」

「……………」

狐面の上からでは、正確な表情どころか、感情すら読みとれないが、予想を立てるとするならば、きっとあの狐面の下は——無表情だっただろう。

八重は再び懷に左手を差し入れると、いくつかの式神を放り投げ、そのうちの一頭に跨り、その場を後にした。

「あ、うぐ……」

識織が狐面の少女の後ろで、悲痛なうめき声を漏らす。

狐面の少女は、群青色の和装に飛び散ったまばらな紅い模様を気にした様子もなく、識織の方に歩み寄った。

近くで中腰になり、識織の手首を掴むと脈を測りだす。

とくんとくん、と規則的だが、今にも消え去りそうな脈にですら、狐面の少女はなんのリアクションもとらなかった。ただただ事務的

に、識織の生死を確認しているだけだった。

狐面の少女はしばし一考し、少し経って思い立ったように識織の身体を乱暴ともいえる仕草で掴むと、その線の細い体軀からは考えられないぐらい彼の身体をひよいと右肩に担いだ。

そうして、なるべく振動を与えないように配慮しているのか、柔らかな高速移動と表わせばいいのか、流れるように通りを走って行く。

残ったのは、誰のとも判別付かぬ血の海と、それに映る紅い月のみだった。

真理とはなんだろうか、と本多識織は考えたことがあった。

辞書などには、どこも偽りの無い、明らかで隠れごとの無いというところに重点が置かれている。

だが、宗教的側面で言えば、現象を支配する根本原理、という似ているようで似ていない意味合いに変わってしまう。

真理という言葉ですら、多面性を持っている。

そのころの識織は、そのことにあまり納得できなかった。

真理の類義語、真実が、『真実はいつも一つ』という使われ方を

していたからだ。

ならば、それは全で一繋がりなのではないか、とその当時の彼は、ほぼ直感的に考えた。

全ての根源はまったくの同じで、それから全ては派生しているのではないかと。そんなことを、ほんの少しだけ考えた時期が、たしかにあった。

だけどそれは、閑話にすらなれない、心理描写の一端で、もう識識の記憶には無いことだった。

断続的な電子音が、識識の意識に触れてきた。ピツピツ、と規則正しい電子音が、意識が浮上するにつれて、どんどん大きく聞こえてきた。

薬品の香りがする。それも、病院など、医療機関独特の薬品の香りが、鼻腔に充満していた。

次に、体中を火傷したかのような猛烈な痛み。体中をいくつも刺し貫かれたような。

どうやら、病院に運び込まれたらしい。

瞼を開けようとすると、接着剤でもつけられたように開かない。倦怠感も酷く、身体を横に転がそうとしても、ピクリとも動かなかった。

仕方無く行動するのは諦めて、ゆつくりと意識を集中させる。

(……そっか。たしか、俺、殺されかけたんだっとな)

あれは、どう考えても自分の失態だ。考え不足だ。

少し考えれば普通に気付くはずだった。あの狼に風莉が襲われているのを確かにこの目ではっきりと確認したはずなのに、それが連続自殺事件に繋がるものと気づいていたくせに、久々の戦闘の空気に当てられて、すっかりと失念してしまっていた。

識織は心の中で悪態を吐く。

どうやら窓が開いているらしく、心地よい春の風が頬を撫でた。

そっいえば――誰が、俺を助けたんだ？ と、傾げない首を気持ちだけ傾がせる。

あの状況。サイズが少し小さくなっていたとはいえ、一メートル以上の狼が百頭以上いるあの場所から、誰が自分を助けたのだと。

おそらく、一般人では対戦車用ライフルを持っていたても、かすり傷一つ負わせることも出来ないだろう。

ならば、誰が。

思い当たる人物で言えば、やはり能力者関係とあと一人。

あの状況で言えば、一頭の巨狼から逃げ回っていた風莉では論外。生徒会長源終夢ならば笑いながら打破しそうだが、笑いながら敵に加勢する可能性すらあるので論外。

クリエイト
『創造』、論外。

能力者関係の人物が全員論外だったことに、多少の驚きを隠せないのだが、如何せん、一人ツツコミどころかリアクションすらもとれない身だった。

――残る一人。

心当たりがあるのは、あと一人だけ。

その人物を形容するならば、自分の影だ。いるのが当たり前で、いるのに気がつかない。存在力は永久的なのに、存在感はどこか抜け落ちている。

「あ、あー……なんだ、喋れるのか。てつきり、喉潰されてんのかと思った」

気がつけば、身体全体を苛んでいた痛みも、若干和らいでいた。どうやら、自分が目覚めたのは投薬してからすぐのことだったらしい。

手の平を握ったり開けたりしながら、身体の調子を確かめる。

うん、悪い。

痛みが和らいだといっても、どうやら動かなければの話らしい。それもそのはず。体全体を深く噛みつかれたのだから。本来ならば後遺所の一つや二つ残っていそうなものだ。

「助けてくれてありがとな、——」

枕元に感じていた一つの気配が完全に消え去った。だが、逆に気配を消し過ぎてどこにいるのか分かりまくってしまう。どうやら、窓から飛び降りて脱出しようとしているらしい。

識織は、それを止めなかった。

数瞬後には、部屋の中にぽっかりと開いていた気配の穴も消え去り、何事も無かったかのようになっていた。ゆっくりと、瞼をこじ開ける。

——狐面が視界いっぱいに広がっていた。

「どうわアッ!？」

「……………」

狐面を被った少女はぴくりとも動かない。ただ、狐面の目の部分に開いている小さな穴から、こちらの顔を至近距離から見つめていた。

心臓が高鳴る。

どうやら、気配を消し過ぎていたのは完全なる騙しで、本当は綺麗に室内の気配に自らの気配を同調させて、部屋の中に留まっていたらしい。

手の込んだ嫌がらせだ。

狐面の内側にぶつかる呼吸音がなんとも艶めかしく感じる。そんな自分の意外性のあるフェチ（呼吸フェチ）に目覚め、識織は若干どぎまぎしていた。

それでも、狐面の少女はぴくりとも反応しない。まるで剥製のように。

と、不意に狐面の少女が群青色の和装の胸の中に手を突っ込んだ。和服がはだけて、若干白い肌と、きつく巻いたサラシが目に見え込んできて、より一層心臓の脈動が早くなる。

どくどくどくどくどくどくどくどくどくどく、と不自然な脈動まで混ざりはじめた。

狐面の少女は、和服の中をまさぐるようにしながら、しばらくすると、凜とした様子で黙ったまま白い封筒に入った手紙を突き出した。

「う、受け取ればいいのか？」

「……………」

狐面の少女は無言で頷く。

識織としては、いや、全男としては、若干はだけた感のままの和服から覗く素肌が物凄くいやらしく感じる。真っ裸より、断然エロく感じてしまう。

識織は、視線は手紙に移し、意識は狐面の少女の素肌に十割残したまま、突き出されている手紙を痛む腕でゆっくりと受け取った。気付けば、伸ばした腕は、包帯とガーゼがしてあった。どうやら、意識を失った後、よほど多くの場所を噛みつかれたらしい。

彼は、受け取った手紙をその場で広げて読もうとしたその瞬間――白刃が煌めき、識織の耳たぶを浅く切り裂いて、枕を紅く染めた。何が？

狐面が振った脇差だ。

「ちょ、ちょちょちょ！？ 危ないでしょーが！ 怪我人、それも重体患者の怪我をこれ以上増やして、俺をどうするつもりだデメエ！」

「……………」

無言で、耳たぶのすぐ横につきたてられたままの脇差が、ほんの少し斜めに傾いた。

ぴっ、と紅くてらてらと輝く液体が、耳たぶから少しだけ溢れだしてきた。

——洒落じゃない。

なんでこんなに自分が焦らなければいけないのかよくわからない識織だったが、狐面の少女の忠告通り、今は手紙を開けるのをやめた。

それに満足したのか、狐面の少女はゆっくりと脇差を引き抜き、鞘に納め、和服の帯に差した。

ほっと、胸を撫で下ろす識織だったが、なぜか、また顔が近い。

「な、なんだよ。ベタなこと聞くけど、俺の顔になんかついてんのか？」

「……………あ」

「あ？」

「……………お大事に」

そう言つと、今度こそ狐面の少女は、窓から飛び出し（目測ビル四階）華麗に地面に着地した。そして、こちらを振りかえると、礼儀よく一礼してから目にも止まらぬ速さで走り去って行った。

どうしたんだろう？ と首を傾いでいると、次の瞬間、勢いよく病室のドアが開かれた。

「ふふ。こんにちは、識織くん。やっぱり襲われたみたいね」

心理の読めない笑みを零しながら、生徒会長源終夢がそこには立っていた。

「なんでもお見通しですね」

「私も狼に一回襲われたから。まあ、予想できると言えば、簡単だったわね」

「はは。敵いませんね」

「私が学園を卒業するまで、私を超えることを許さないから」

「……普通は、『私を超えて先に行け』みたいなことを言うんじゃない」

「普通？ そんな味気の無い物、食べさせられたって美味しくもな
んともないじゃない」

「普通がコンプレックスの人に謝れ！ 特に俺とか！！」

「識織くんの場合は、味気ないというより、普通にマズそうよね」

「……ワー、イマノハキズツイタナー。キズツキツイデニ、イツカ
イネヨウ。オヤスミナサイ」

顔も声も真っ白になった識織は、ロボットののような動きで布団を
首までかけ、ゆっくり目を閉じ就寝しようとする。

それを見た終夢は、自分の右手にぶら下げたメロンを見て、わざ
とらしく残念そうな溜め息をつきながら、まるで識織に語るように
独り言を零しだす。

「マスクメロン持ってきたんだけど、要らないみたいね。風莉に盛
って、美味しく頂こうかしら」

識織の身体がぴくんと反応する。

——女同士で、女体盛り……だと……？

「あの娘、たしか口移しが好きだったわよね。ほんと、可愛いんだ
から。ふふふ、笑いが止まらないわ、どうしましょう。ふふふ」

終夢の平坦な笑い声を聞きながら、識織の頭の中は乱気流の如く渦巻いていた。

彼女の言葉の一つ一つが、識織の男心ウィークポイントを抉っていく。

（く、最近の若者の性は乱れていると聞いたが、これほどまでとは……我、一生の不覚）

「まあ、いいわ。今度、裸の風莉と一緒に識織くん家に突撃しちゃうかもしれないけど、そのときは、ゆっくり楽しんでね？　そして、風莉のハジメテを」

「それ以上は駄目エエエエエエエエエエ！　って、痛てエエエエエエエエエエッ！？　叫んだら傷口が開いたア！？」

「奪ってあげてね？」

「……俺の、必死の防御も、まるで無意味」

うなだれる識織と、平坦に笑う終夢。

そのあと、看護師さんが来て、騒いだことでお叱りを受けてしまった。そして、その時には既に終夢もメロンを置いてどこかに消えてしまい、看護師さんの目が危ない人を見る目になっていたのに気付き、若干へこんだ。

嚴重注意を受けて、また一人になった病室で、識織は——一回だけ、悪態を吐いた。

「……クソ」

その後は、ずっと、ずっと窓から空を眺めていた。

第十四話：狐面の少女（後書き）

新キャラ出ました。

期待の超新星、狐面の少女ちゃんです。今後のためにも、名前は明
かしません。

フフ（´w´）フフ

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十五話：元凶

「ぐ、あア」

煤けた廃病院に、一人の男の呻き声が響く。

右腕を押さえながら、不可思議な光を発している札のようなものを、そこに押さえつけている。

右手首は、寸分の狂いもなく垂直に斬られていて、肉どころか骨すらも綺麗に両断されていた。その断面からは血は漏れださず、代わりに、札から漏れる不可思議な光と同じようなモヤが零れ落ちていた。

「誤算だった……毒刀だったか」

おそらく、刃の場所によって違う毒が混入するように、特殊な技法で塗りこまれていたのだろう。ひくつく喉と、痺れた四肢の感覚から、麻痺毒のようだ。

運が良かったのか悪かったのか。

きっと、あれ以上本多識織に近づいているか、危害を加えようと交戦状態に入っていれば――致死性の毒が刷り込まれた刃の部分で切り裂かれていただろう。

「痛み分けか……」

本多識織とて、いや、本多識織の方がこちらよりも重傷のはずだ。

だが、遅効性の上、延効性もあるようで、二日経った今でも、止血程度にしか魔術を使うことが出来ないでいた。

二十二世紀目前の、今の医療技術を使用すれば、すぐさま切断された腕を接着させて、今頃には本多識組織の『真理の明眼』を手に入れていたところだろう。

だが、彼はそれを絶対にしない。
科学の力を、許さない。

たった一人の少女の未来も守れなかった科学の力なんぞに、自分の身を任せることなど出来やしなかった。

「……作戦を、改める必要がある、か」

全ては、あの狐面の少女の出現が原因だった。

八重とて、その情報をまったくもって頭に入れてなかったわけではない。むしろ、必要以上に詰め込んだ。

本多識組織と言う少年の周りで起こったあらゆる事件を探り、何度もシミュレートをし、二日前の夜、決行に移ったのだ。

だが、あの狐面の少女の存在は、ほぼ今回のことには関わらないだろうと確信していた。

過去の出来事を漁れば、すぐにそのことに至る。
だから、作戦対象からは外していたというのに。

「人とは、やはりわからないな。不確定要素が多過ぎる」

少しだけ痺れる舌をゆっくりと動かしながら、独り言をぼやいた。
ひとまずは、作戦の練り直しだった。

遠隔操作で、彼の少年が入院している病院を崩壊させるという手だてもあったが、それはあの女との契約違反になってしまう。それだけで、全てが水泡に帰してしまう。

ぶつぶつと呟く八重。

薄暗い廃病院の一室には、確かに彼一人しかいなかった。
だが――、もう一つの影が、そこには現れていた。

「…………どう？」

「…………」

八重の顔の横すぐ近くに顔を持ってきて、耳元でそつと囁きかける。声の質からして女。それも、人を小馬鹿にしたような。服装は、黒いローブ。その下からちらりと見える自然な金髪が、彼女が日本人でないことを示している。

「答えないの？」

「…………あと、二、三日もすれば動けるようになる。心配するな」

「きみの心配をしているんじゃないよ。なんでわたしがきみなんかの心配を…………。『真理の明眼』のことだよ。あの両眼に傷をつけないだろうね？」

「…………ああ」

嘘は言っていない。本多識織本人には攻撃を加え、ほぼ瀕死状態にまで追い込みはしたが、どうせ生きているに違いない。それに、この女もそのことを知っている。

「じゃあ、わたしは戻るけど、さつさと『真理の明眼』集めてね？
わたしだって、他に集めるものが在るんだから」

「わかつている。お前こそ、失敗するな」

「失敗なんかするかよ。きみと違って、本物だぜ？」

「……」

「傷ついた？　ねえ、傷ついた？　くく、薄っぺらいプライドだなあ、イエローモンキーは」

耳元で大声で笑い声を上げる女に顔を顰めながら、八重は切断された箇所を札を当てつづけていた。

そんな何の反応も示さない八重にからかうのも飽きたのか、溜め息をついて近づけていた顔を離れた。そして、忽然と気配を消す。

八重は振り返らなかった。

（あの女など、あの組織など、利用するだけ利用するだけだ。何の思い入れもない）

仲間とは思っていなかった。

誰一人、自分すらも信じてはいない。

ただ、たった一人を救うことが出来たなら、どうなったっていいだから、一人の男は魔道へと堕ちた。

そのことに、光ある世界を捨てたことに、後悔も未練もありはない。

「あぐぐぐぐぐぐ」

身体が麻痺していた。どうやら、あの刃には麻痺毒が塗りこまれていたみたいだった。それも、血脈すら麻痺しかねないレベルの。なんとか、なんとか唸り声を上げて通りすがりの看護婦さんを呼び止めた後、パニックを起こされて、こっちの方がパニックというツツコミを入れることすら出来ず、彼女が落ち着くまでの三分間、ほぼ無呼吸で無呼吸我慢大会を血行することになった。字が違うのは、間違ってはいない。

「本多さん！ 病院内ではお静かに！」

「あんたもだろうが！ 危うく死にかけたわ！ なんで看護師なのに患者がもがき苦しんでるときに患者よりも焦っちゃうんだよ！」

「本多さん！ 病院内ではお静かに！」

「NPCかあんたは！」

なにはともあれ、味方に殺されずに済んだらしい。よもやあの少女に殺されかけるとは。

人生何が起るか分かったものではない。

それよりも、終夢が帰ったことだし、狐面の少女もいないので、ついに渡された手紙を開封することに。

期待半分、その他諸々の感情半分。

ぱりっ、と糊づけが剥がれる音。

中には、和紙とそれに達筆な文字で書かれて逆に普通の人には読むことすらできないような文が書かれていた。

だがしかし、識組織からしてみれば、中学三年生時までに目が腐るほど見せられたものだった。

「なにになに？　——」

『拝啓　新春の候、識組織にはますますご健勝のことと存じ上げます。』

このたびは命令も無しに助けてしまい、申し訳ございませんでした。しかし、識組織の命の危機に居ても立つてもらえず、身体が動いてしまいました。すみません。識組織の仕打ちならば、どんなことでも喜んで受けましょう。その場合は、是非、識組織の役に立てる形で。

さて、本題はしばらく横に置いておくことにして、世間話でもいたしましょう。

最近、識組織近辺で『不穏な動き』が見られます。本来ならば、識組織が襲われる前にご報告をすればよかったのですが、すみません、私の不確かな情報であなたの貴重な思考能力を割くわけにはいかならないと思い、心の中に留めて置いた次第でした。これは私の判断不足でした、すみません。そして、識組織が襲われた際も、あなたならあのような図体だけが大きな狼三頭に負けるわけがないと思えば樂觀視していました。まさか、身体の中から百八頭もの狼が出てくるとは。これはもう、識組織に私の貞操を捧げる程度では済まないと感じている次第でございます。しかし、これからは自らを強化した私が護衛に回りますので、おそらく、対戦車ロケットを撃ちこまれても死ぬことはございません。嗚呼、識組織ならそんな心配は必要ありませんね。重ね重ね、失礼しました。

まだまだ寒さの残る季節ですので、身体には十分のご注意を。』

最後は敬具と、丁寧な結びで締められていた。

識織はいろいろの思考がフリーズしていた。とにかく、ツッコミどころが多いではなく、ツッコミどころしかない文章だった。

口に出してみることにした。

「まず俺のことを過大評価し過ぎだ。あと惚気話が所々混じり過ぎだ。そして俺はお前の貞操を奪うつもりはさらさらない。逆に奪われそうで怖い。据え膳食わぬは男の恥？ なにそれ、前時代の遺物でしょう？ 人間なら据え膳食う前にいただきますを言わなくちゃなりません。そして自らを強化ってお前体に何をした。確かに男としては、サイボーグ少女とかに興味が無いわけでもないが、やっぱり何の手も加えられていない少女の身体をげふんごふんっ！ まずいな、まだ身体に麻痺でも残っていたか」

途中からツッコミではなく、ほぼ妄想に突入してしまった。

そこから何故か猫耳の重要性やら、スパッツの生存の確認だとか、裸より微妙に服脱いでる方がエロいよなとか、女の子はやっぱ笑顔だよなとか、もう手紙の内容は関係なくなっていた。

そして仕舞った手紙の裏の隅っこに『殺したいほどに愛しています』と書いてあることには、全然気付かなかった。

それから数日間、終夢が恥じらう風莉を連れてきたり、クラスメイトAが普通の見舞い品を持ってきていじられに来てくれたり、窓の外から狐の纏わりつくような視線を感じたりと、いろいろ忙しかった。

そして、一週間後、退院。

——失う時が、やってくる。

第十五話：元凶（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております（＊、ω、＊）

第十六話：『先見の晴眼』

「え？ 今日も大事を取って休んでいい？ 本当ですか！？ え、給料も出るから大丈夫？ けど全快したら十分働いてもらうよ？」

識織は思わず突っ伏していた枕から顔を起こし、椅子の背もたれに背筋をぴんと伸ばしてクラスメイトの目も憚らず大きな声で叫ぶ。

「ありがとうございます！！」

果てには椅子から立ち上がり、大手の商談が決まった社会おとなの歯車のようにお辞儀をする。もちろん、虚空相手に。

「ええ、ええ。ありがとうございます。では、また今度」

スマートフォンを操作し、通話を遮断する。そして、至福の表情でまた低反発枕へと頭からダイブした。ふおおおおお！ と今世紀最大の興奮を露わにしながら、枕を抱きしめた。

それを、井上さんの席に座ったクラスメイトAが呆れたように眺める。

「お前、二週間ぐらい学校休んだと思ったら体中穴だらけで帰ってくるのな。今度はただけアブナイことに巻き込まれてんだよ」

識織の身体に巻かれた白い包帯と保護ネットに目を向けながら、

やはり呆れたような声を漏らす。

「狼百八頭に噛みつかれた後、仲間の狐面の少女の毒刀によって呼吸困難を併発、さらに妄想による禁断症状、もう俺の心体はボロボロだぜ」

「最初の以外は絶対にあれだよな。ギャグだよな」

「ギャグ補正のかかったシリアスだ。分かるな？」

「お、うん？ ……いや、ちょっと待てよ？ いや、盛大に待て。ギャグとシリアスは双極を成す存在。故に！ 共存はあり得ないだろうが！！」

「どこにツツコミ入れてんだよ。まず狼百八頭に襲われたというところにツツコミを入れるよ。ボケ要員が無茶しやがって」

そんなところで、本多識織高校生は通学用鞆を手に提げ立ち上がる。お前今さつき立ち上がった座ったばかりじゃねえか、というクラスメイトAのツツコミは無視した。

今はコイツの相手をしている場合ではない。

識織が入院していた期間は二週間。

二十二世紀直前の日本には新たな休日が加えられ、ゴールデンウィークがプラチナムウィークスに変化したといっても過言ではない。なにはともあれ、ゆとり世代の肩身がまた狭くなったわけだった。それはともかく、識織がクラスメイトAをここまで半分無視をしているわけは、二週間ぶりにひなどり園に行きたいわけで、いつも見ている少しイケメンなクラスメイトAの顔なんてどうでもいいわけ、というわけで、さっさと帰りたいわけ。

「じゃあな、アキラくん。さつさと生徒会長を攻略してくれ」

「……そうだな。なんだか、今回も頑張ってるみたいだし、俺の出番は無いか」

「多分一生ねえよ」

「言ったな。絶対助けないからな、絶対だ」

「いや、本気でヤバい時は助けるよ」

そんな掛け合いをして、識織は午前で終わった学校を去った。

ちなみに、このゴールデンウィークの課題の多さは、明蘭学園生徒にとつては地獄のレベルである。ようするに、識織にとつての休暇など——いや、それはどうでもいいことだ。

識織が入院している二週間の間、八重継真が何もしてこなかった理由。

八重も右手首を切断された上に、強力な麻痺毒を使われて数日間は無動機だったとはいえ、識織だってそれ以上の傷を負わされていた。それも、一週間は看護師の手助けなしにはベッドの上から起き上がれないほどに。

それよりも八重継真は先に回復していた。
ならば何故、八重は何のアクションも識織に起こさなかったのか、
という疑問が当たり前のように降ってくる。

今現在の識織の防御網を越そうとすれば、必ずあの狐面の少女と
ぶつかることになる。

八重が集めている情報の限りでも、その戦闘力は本多識織の遥か
上をいく。

その上、だ。

近日、狐面の少女は日本から姿を消している。どんな古風な方法
で太平洋を渡ったのかは知らないが、旅客機や船舶などではないの
は確かだった。

そして、近日、東京湾に忍び寄る、海に浮かんだ小型の漂流物が、
式神の中の記録に蓄えられていた。その中から出てくる人影も。

それも含めて、八重の計画の穴だったわけだが、あの戦闘時、狐
面の少女の登場の仕方に違和感を感じた。

本多識織襲撃計画を発動させた時点で、すでに周囲五十メートル
は巨狼の探知範囲だったわけだ。イヌ科の動物の聴覚を舐めてはい
けない。その能力を半径五十メートルに絞り込んだのだ。その中で
有用な情報を取捨選択し、八重に送り届けられるようにも設定され
ていたわけだが、まったくそれがなかった。

そのことが、何を意味するのか？

もちろん、五十メートル先から刹那とも言える速度で八重に迫り、
その手首を切り落とし、立ちほだったということになる。

そんなこと、生身の人間では不可能だ。

そこで思い浮かべられるのは——超能力。

そして、渡った先は、おそらく超大国アメリカ合衆国。

おこなったことは、容易に想像できる。

近年でも、噂に事欠かないアメリカの超能力開発。そしてこの世界には、超能力者が確かに存在している。

そうとなると、もう、あの狐面の少女を突破することは不可能に近い。

五十メートルの距離を刹那よりも速く詰められる、本多識織より戦闘能力の高い人間がいるところなど、もはや核シエルターに籠られるほうがまだやりようがある。

だからといって諦めたわけではない。

八重が所属している魔術組織によって彼に与えられた任務は、『異眼』系の能力者を捕縛すること。

今のところ、最有力候補は本多識織の『真理の明眼』。『真理』の名を冠するため、もっとも『源点』に近いとされている。

だが、それに近づくのは今のところ不可。

ならば——セカンドプラン第二計画を構築するまでだ。

そして、さほど労せず見つけることが出来た。

決行は、今夜。

信じるのは、己が操る式神からの情報のみ。

ひなどり園を訪れた識織の両手には、巨大なスーパーの袋四つ。ロゴは英語表記で『cheap market』。みんな大好きチーブマーケットのレジ袋だった。中身はもちろん、誰にでも当たり障りの無いような平凡なお菓子。

入った瞬間、「しきおりにーちゃん！」といくらかの子供たちが駆け寄って来て、腰回りに抱きついてくる。

「識織さん、ですか？ 怪我してるじゃないですか!？」

識織の包帯だらけの姿を見て蒼白な顔になる藍華。ミイラ男張りの包帯の量。だが、子供たちには逆に好評のようで、「しきおりにーちゃんカッキー!」とめっちゃ興奮している。

しかし、興奮している子供たちは良いとしても、目の前の藍華だけには、なにか理由でも話しておかないといけないだろう。しばし一考した後、

「自転車でガラスに突っ込んでしまって、体中ぼろぼろ。二、三日生死の狭間を彷徨ったんだ」

「……はう」

「藍華さん!？」

まるで貧血でも起こしたかのように頭を押さえて崩れ落ちてしまふ藍華。彼女が地面へと倒れてしまふ寸前に、識織が抱きとめた。

その際、腕に抱えていた

「血、血……想像しただけで、はうう」

「……想像しただけでダメな人が、現実にいるとは」

今も腕の中でこめかみを押さえながら、「はうう」と呻いている藍華を希少生物を見るような目で眺めながら、女の子の身体ってやつぱり柔らかいんだなー、とかふしだらなことを考える。

女性の直感は鋭い。

男が邪な気持ちを持つと、すぐに気付く。

「……識織さん？」

「ん、んー。ん？」

「……おほん」

「はいごめんなさいゆるしてください」

いきなり土下座を敢行する識織。地面に額をこすりつけながら、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいと連呼し続ける。

ぼさぼさと地面に落ちたレジ袋を体いっぱいを持ちながら、一人の少年が尋ねてくる。

「にいちちゃん、それ、なにやってるの？」

「これはね、日本に伝わる最高最強の奥義。ドゲザというものだ」

「ドゲザ？」

「心を込めた、謝罪方法だよ」

「ふーん。だったら、おのこししても、これすれば許してもらえるかな？」

「もちろん……はい、そうです、許されません」

ここ一年で一番鋭い睨みを飛ばされた識織。熱せられたフグの身のように体が縮んだような気がする。誰から飛ばされた睨みだとかは、言うまでもないことだ。

「子供は純粹ですので、何でも信じちゃいます。なので、見せる背中には確かなものをお願いします」

「……あい」

声がか細くなった。切ない気持ちで心が満たされる。

——俺の背中は、確かじゃない……。

何だか自然と笑みがこぼれる。もちろん、自虐的な笑みだが。

「にいちゃん」

「なにかな？」

両手両膝を地面につけて打ちひしがれていると、レジ袋を持った少年が話しかけてくる。

少年はそのレジ袋を一旦地面に置くと、親指を伸ばし、最大級のスマイルをこちらに向けながら、年相応の快活な声で言った。

「なんかいいことあるって!」

全識織が泣いた。

主に情けなくて。

何が嬉しくて小学生に慰められないといけないというのだ。それもいい年をした高校生が。まだ半分しか生きていない子供に。

「くそう!」

少年に叫ぶわけにもいかないの、とりあえず無限大の空に吼える。

まあ、それから子供たちがいつものようにお菓子を持って行って、藍華が、「ちゃんと分けるのよー」と心配そうに見送る。

「そう言えば、まだ一か月も経ってないですけど、大丈夫なんですか?」

「えつとですね。藍華さん、この現代には様々な収入方法があります」

「まさか、ごうと……っ」

「違うわ!? なんでまさか? っていうかなんでそこに至っちゃった!? 臨時アルバイトですよ!」

「えへへ、ごめんなさいごめんなさい」

可愛らしく片目を瞑って、「許してください?」と顔の前で両手を合わせている。

可愛かったので許した。

三十を超えた親父がしていたのなら、二度と片目どころか両目も未来永劫開くことは無かっただろう。

「そっいや、イブちゃんは？」

「いつもどおり、ですね。私にもわからないような分厚い本と向かい合ってます……仕方がないのは、わかってるんですけど」

「よっしゃ待つてろイブちゃあああああああああん！！」

走っていつもの場所に行こうとした識織の背中に、少し大きめの声で言った。

「あと、ちょっとだけですけど……ほんの少しなんですけど、いつもとは違ってます」

「違う？」

「……なんか、こう、ブレているっていうか、静かなんですけど何かにじっと耐えてるみたいな感じがするんです。それで、できたら――」

力になってあげてください、と、儚そうに笑みを零しながら言った。

識織は振り向かず、そのままいつもの場所へと歩を進める。

少し離れてから、藍華は自分にもあまり聞こえないほど小さな声で、呟く。

「――私には、できませんから」

いつもどおり、そこには白い彼女が埋もれて本を読んでいた。
しかし、今回は埋もれていたのは人形ではなく、その場の空気。
自分の創りだしている空気に埋もれてしまっている。

ただっ広い室内の日が射さないところにぼつんと椅子を置いて、
そこにちよこんと座って何かの本を読んでいる。

確かに、いつもとは違った。

いつもの彼女というのが物凄く曖昧なわけだが、それでも、偏った印象でそれを無理矢理平均するとしたら、彼女のいつもというのは、それは鉄のようだと表現するべきなのだろう。

いや、打つても響かないのだから、空気のようにだと表現すればよいのか。

とにかく、不変だ。

だが、それに違和感を感じる。

罅が入ったかのように、異物が混じったかのように。

「イブちゃん」

「……なんだ、キサマか」

「識織。名前呼ぼう」

とりあえず、いつものような会話。

齟齬なく終えた会話。
会話。

「今日も、綺麗事か？ 心配しなくても、ボクは綺麗なままだ。誰にも穢されていないし、穢される予定もない。そんな未来は無い」

「——そうだね、綺麗事だ。……イブちゃん、だから、君が隠している何かしら、全部綺麗に曝け出しちゃえよ」

識織は、どこまでも会話を続ける。

斎歩は分厚い本から顔を上げることもせずに、ページをめくりながら識織の言ったことに答える。

「生理が来た」

「ぶほっ！？」

思わず嘔き出した。向かい合って話していた斎歩の顔にも少々唾が飛び、嫌そうに払いのけながら、斎歩は無表情で言う。

「意外か？ ボクだって十二だ。生理ぐらい来る」

「だ、だからってそれを言う必要は」

「キサマが言えと言った。違うかロリコン」

「ロリコンは違うけど……」

恥じらいもせずに堂々と言ってのける。堂々というのもまた表情には出していないし、ただの識織の感想だが。

「隠し事は終了だ。さっさと外に行ってガキ共と遊べばいい」

そう言えば、女の子は生理痛がどうやらこつやらと妹が昔言っていたような気がしなくてもない。そのときは適当に聞き流していたのだが、今、ああそうかと実感しているわけである。

識織はなんだかブリキ人形のようにかくかくとなってしまった体を動かしながら、斎歩に背を向けて外へと出る。

これで、この殺伐とした雰囲気の原因も分かったわけだ。

藍華さんに赤飯でも頼めばいいかな？　とか思いながら、挙動不審でその場を去った。

残された白い彼女は、ただ、味わうようにゆっくりページをめくる。

ぺら、ぺら。

ぺら、——ぺら。

夕方。夕日というのは、やっぱり人をノスタルジックな気分させる。その中で小さな子どもたちが声を上げて遊んでいるのを見ると、尚更。

「ははははははは！　にいちちゃんこつちこつち！」

「こつちだつておにいちゃん！」

「ふぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ!!」

その子どもたちの中で、一緒になって本気で遊んでいる高校生がいた。遊んでいるというよりも、捕まえられなくて怒っているというか。

なににせよ、本気で遊べるというのは、とても気持ちの良いものだった。

「織織さん、今日もありがとうございました。ほら、みんなも」

「「「しきおりにいちゃんありがとー!」「」」

この黄色い感謝の声も、最初はくすぐったくなるものがあつたが、今では随分と慣れたものだと思う。そうは言っても、まだまだ背筋がむず痒くなったりするのだが。

夕日もほとんど沈み、少し不気味な青紫の空が広がっている。今日も、これでお開き。

「そう言えば、お父さんとお母さんは仕事？」

「はい」

仕方の無いことだった。

これだけの人数の子どもたちを養うためには、休んでいる暇などない。

だとしたら、十六歳。

大人ぶっていても、実はこの時期、大人が恋しくなってくる。

「藍華さん、俺の胸にダイブしてもいいぜ？」

識織は、多分これ以上ない優しい笑顔を浮かべて、抱擁のポーズをとる。

藍華はくりくりとした瞳を細め、怪しむように一步下がる。

「……へ、変態」

「……あれ？」

どこかで何かを間違ってしまった識織は冷や汗を垂らしながら、藍華から一步離れる。

そして、糸が切れたように震えていた藍華の身体が稼働する。

自分の身体を軸にした左手の一撃は、乾いた音を上げて、日没を告げた。

冷たい空気に左頬が悲鳴を上げる。ネックウォーマーの上からではよくわからないが、その下には綺麗な紅葉が張り付いているはずだ。

「うーん、あれだな。まさか変態だなんて言われるなんて。心外だぜ」

俺は普通だ、と識織は苦笑いを浮かべながら原付バイクを走らせる。

辺りはすっかり帳が落ちて、心なしかいつも以上に人氣が少なくなっている。

そこで気付けば、明日からゴールデンウィーク。別に今日から旅行先に出かけてもおかしくは無い。

「旅行か。行ったことは、修学旅行だけか」

現在までに二回。一学期中にある修学旅行も含めると、三回になるか。

いや、現在進行形で、自分は旅行中ということになるのかもしれない。自分探しの旅、と言う名の家出に。

閑静な住宅街に、原付のエンジン音だけが響く。

少し沈んだ気分を戻す為に、識織はあの八重という男について考えることにした。

（そう言えば、あれから襲撃が無いな。――まさか、アイツ助けるついでにヤツちゃった？）

あり得る、十分にあり得る。

識織は、無残に切り刻まれた八重の身体を想像しながら身震いをした。

だが、それは無いだろうという相反する予想も、同時に立っていた。

敵の駆除と、識織の命、二つを天秤にかけたときに、あの少女の中でどちらに傾くかなんて、論ずる必要もないことだった。

論ずる必要もないことなので、せずに、自国を確認するためにスマートフォンを取り出そうとポケットを探る。が、無い。

「あり？　ありり？」

原付を一旦止めて、体中を探る。

だが無い。いくら探っても、無い物は無い。

「ありー？ 子どもたちと遊んでるときに落としちゃったか？」

じゃあ、戻るかな、と。

識織は原付を反転させて、再度アクセルをかける。

壊してくれるなよー、と戦々恐々と眩きながら同じ道を引き返していく。高かったのだ。そして、唯一の通信手段を潰されたら、この後の識織の人生など真っ暗闇だ。主にバイト面で。

数分後。そう、たった数分の道のりだった。時間だった。

識織がヘルメットを脱ぎ、キーを抜いてエンジンを止めたとき、ソレは響き渡った。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
ああッ！？」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンッ！！』

どちらも、聞いたことのある声。

そして、どちらも人外の声にしか、叫びにしか、聞こえなかった。思わず『真理の明眼』を開眼させる。

どつと汗が噴き出るのが分かる。体中が痺れて、歩くのもままならなくなる。

それでも走って、走って走って走って走って走って、自分が持つ最大限の力を込めて——叫んだ。

「藍華さんッ！！」

——返事は、無かった。

駆けこんだ先には——地獄が、広がっていた。

血。肉。骨。食い散らかされた子供。そう、食い散らかされた。肉。血。骨。さっきまで遊んでいた子供。なれの果て。食事。餌。空腹を満たす食物。生贄。あそこに散らばっているのは肉。子供だった肉。遊んでいた肉。子供。血みどろに沈んだ子供だった肉塊。破裂したボール。大破した遊具。血肉を吸った砂場。血肉骨血肉骨血肉骨。

目の前で、首を食い千切られる、藍華の姿。

胴体と首。水気を含む音を上げて、乱雑に引き千切られた二つのパーツ。

切り離されたそれは、いつものように、子犬のように駆け寄ってくることもなく、人懐っこい笑みを浮かべることもなく、子供たちの肉溜まりへと落下した。

『ガールルルル』

唸り声を上げ、鋭い歯を晒す巨狼。

その刃と歯の間に。無数の肉片。全身に血の跡。

——死。

死を与えられた。間接的他殺なんかじゃない。直接的他殺だ。殺人だ。

死んだ。上から下まで隈なくあちこち全て完璧にどこにも穴は無く万全に、万が一なんて言葉はどこにもなく、喰い尽くされた。

頬に、何かが伝った。

その冷たい何かの名前は、思い出すことが出来なかった。

『グルうアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

突撃してくる巨狼。

識織はその顔面に向かって、無感情にナイフを横薙ぎにして、白いモヤへと変質させた。

呻き声も、嗚咽も出なかった。

風景がぼやける。

そのぼやけた視界の中に——この暗闇に堕ちた風景の中に、白い点がぼつりと落ちていた。

銀色の月明かりを浴びて、冷たい空気に体を晒している一人の少女が、屋上にいた。四階よりも、一つ上の屋上に。

現状にほとんど脳が追いついていないのもあってか、その一挙手一投足に目が奪われて釘づけになった。

だが、識織は、そのぼやけた風景しか捉えることしかできない『眼』で、たしかに、見た。

少女の紅い瞳から、瞳から——銀色の雫が頬を伝うのを、見た。

その瞳と、自分の紅い瞳がぶつかり合った。

——『先見の晴眼』

『お前に未来なんてないんだ』と、言われたという。

その少女は、何を視てしまったのかと、識織はいつの日か考えていた。

未来を、この未来を視てしまった。

二年前から、二年前からこの時が来るのを、知っていたのか。

未来はない、と言われた少女は、未来を視た。最悪の未来を。自分では返ることが出来ないような未来を視せられ、何の行動も起こせないままに、この日を迎えた。ただ、己の感情を殺すという作業をしながら。

そして少女は、泣いていた。

嗚咽も漏らさず、一人でこっそり泣いていた。伽藍の洞なんかじゃ、なかった。

だけど、本多識織が見たかったのは――。

ふと、
気がつく。

その後ろ、その後ろ。

たつた今消滅させた巨狼と同じ黒い影が、無数に彼女に迫っていた。

「あ、あ、ああ……」

識織は、まるで自分の意思ではなく糸で操られているかのように、力無く、一歩二歩と前へと進んだ。

まだ、視線はぶつかり合ったままだった。

視線。
紅い視線。

そして、少女が選んだのは、いや、もう何年も前から選んでいたであろうその選択は。

——投身自殺、だった。

[illegible]

ゆつくりと傾いていく彼女の身体よりも速く、速く速く速く、識織は走った。

体に纏わりついていた糸を引き千切るかのように、体を振り乱しながら、識織は、一直線に走った。

そこに、その線上に、二頭の巨狼が。
だが、構わず走り続ける。

その体に巨狼が攻撃を仕掛けてきた。

「どけ、どけよ！ どけえエエエエエエエエエエツッ！！」

壁のように連なる狼の身体をナイフで切り飛ばしながら、走る。
少女の身体が、宙に踊った。

——まだ、まだ間に合う。まだ、まだ、まだまだ！！

だが、狼を切り裂くスピードよりも、小さな少女が落下していく
スピードの方が速い。

「停まれ、停まれエ！ 時間でも空間でも、なんでもいいから——」

——停まって、くれよ……。

どしゃ。

無情にも、無様にも、神様は何の願いも叶えることなく。

小さな少女の身体は、地面へと激突し、白い身体から、真っ赤な
液体を溢れださせた。

第十七話：後悔

分厚いガラスの向こうで、幼い少女の身体が銀色のメスによって切り開かれていく。慌ただしくも冷静に事を運ぼうとする医者達。懸命に、命を助けようとしていた。

全身麻酔を施されたその身体は、いくら切り裂かれようとほとんど反応を見せず、口と鼻を覆う人工呼吸器には荒い息で白い結露が出来ていた。

「親族の方ですか？」

「……ちが、う」

いつの間にか、緑色の施術衣を着ている医者の一人が接近していた。

壮年の医者は興奮を抑えるように荒い息で、分厚いガラスの向こう側を見つめている識識に話しかけた。

「違う？ では、親族の方はどちらに？」

「あの子は、孤児なんだ。親族の連絡先なんて分からない……」

「では、孤児院の経営者は？」

「知らない、知らないんだ！？」 全部、全部全部全部、全部肉の塊

「なったッ！！ 死んでたんだ！！」

識織は分厚いガラスを殴りつける。が、罫などは全然入らず、激しい震動がガラス全体を震わせるだけだった。

医者は驚いたような表情を見せたが、もう一度確認をとる。

「では、あなたが保護者ということで、よろしいですね？」

「……ああ」

「あの先天性白皮症の少女——程度は軽いようです。なのでそのことによる被害は無いのですが」

「助かるのか？」

「助けます」

視線をぶつけあう。

識織は瞼を閉じ——視線をガラスの向こうに引き返した。

「……任せる」

「はい」

そうして医者は、ガラスの向こう側へと行った。一つの命を助けるために。

識織はというと、ただただ、ガラスの向こうを見るしかできないというのに。

——俺が巻き込んだ。

絶対に、そうだった。あとき、八重継真という男を、少なくとも

も二度と行動不能にまで追い込むことが出来ていたのなら、こんなことにはならなかった。

ようするに、全て識織の責任だった。

全て、識織の油断が招いた事態である。

藍華が、肉片に変わったのも。子供たちが、肉片に変わったのも。

——園木斎歩が、こんな瀕死になったのも。

身体の端が痺れ、一気に血液が滞る感じがする。指先はどんどん冷えて、呼吸は荒くなり、やがて息を吸うのも難しくなってくるような気がする。心臓が脈打ったびに、どくんどくと跳ねるたびに、このまま止まってしまふんじゃないかと錯覚を憶える。

——ひなどり園のみんなとの出会いは、それは、別に運命的なものではなかった。ほとんど強引に、識織が彼らの生活に介入しただけだった。

上京したばかりのころに、ひなどり園を見つけて、そこで笑っている子供たちの笑顔が本当に眩しくて、天邪鬼にも泣かせてみたいとか思ったりして、偶然を装ってなんとなく出会って。

一人の少女と出会った。

それから、たったの一年。

たったの一年で何を築き上げたんだと聞かれれば、大したものはい出来なかったと答えるしかないだろう。最終的に、識織の望むことは一つも叶っていなかったのだから。

だけど、それは、かけがえのないものだったに違いなかった。

いつも笑っていた。

自分も笑っていた。

それで——十分だったんだ。

これで、失った後にこんなにも傷つくのは、二度目だった。
どちらも、あって当たり前のものであったがゆえに――失った時は、
消え去った後は、こうだった。

識織は――ただじつとガラスの向こう側を見つめていた。
その眼は、開眼しているわけでもないのに、紅く、染まっていた。

休みの日の朝が、こんなにも気だるい感じで訪れたのは一年ぶり
だった。

目をこすりながら身体を起こすと、身体の節々が痛んだ。今まで
自分が寝ていたところを確認すると、どうやら病院のロビーのソフ
ア。身体を丸めて眠っていたせいだろう。

時計を見ると、四時三十分ほどを指していた。
ぼーっとする頭が、一気に覚醒する。

「――イブちゃんは!？」

「本多識織さんですね？」

声を上げて振り向いた先に、昨夜の壮年の医者が、マスクを外し
てそこに立っていた。

「イブちゃんは？ イブちゃんは？」

「一命は取り留めました」

身体を起こす為に支えていた腕の力がぐんと抜け落ちた。倒れ
た方向が壁で、頭を強く打ちつける。

痛みに涙目になりながら、しかしそこには違う涙も混じっているような気がしてならない。

「しかし、まだ予断はできない状況です。今日の昼あたりが山場でしょう」

「……面会は、できますか？」

医者は少し悩み顔を俯かせた。その動作を追う識者の瞳は、真剣そのもの。

ゆっくりと顔を上げた医者は、硬い表情で、言った。

「あまり刺激はしないでください。興奮して血行が良くなれば、それだけで危険な状況ですので」

「分かりました。ありがとうございます」

「……たしか、ひなどり園でしたか。そこで、人のものと思われる肉塊が山のように見つかったそうです」

医者は、真剣な面持ちで言った。

あの惨状は——きっと、百年ほど前に起こった天安門事件を想起させるものがある。日本史の教科書にも載っているその惨状は、ネットではより真実に差し迫っている。

肉。人の肉だ。人の肉がミンチになって、そこら辺に散らばっている。

日本では、久しく無かった。

「警察の見立てでは、チェンソーのようなもので切り刻んだのか、それとも自作の兵器でも使ったのか、検討中の様です。取り調べの

方も、お疲れさまでした」

「……はい」

知らないの一点張りだった。

いや、分からないのバリエーションも含めれば二点張りか。

自分とひなどり園との関係は正直に話したが、それ以外は二点張り。

「では、これで」

「……ありがとう、ございました」

識織は去っていく医者の背中に、深い礼をした。
彼が医者に来るのは、ただ、それだけだった。

第十七話：後悔（後書き）

前回のが長かったので、小出しにしてみました。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十八話：殻

殺菌消毒した特別製の衣類に着替えて、ノックもなしに静かにドアを開けた。

日の入らない薄暗い個室に、少女は大量の機器を取り付けられたまま眠っていた。

死んでいるんじゃないかと思うほど真っ白で、病弱な印象を少なからず受けた。

不謹慎なことにも、その病弱で儂げな姿にこそ、美しさを感じてしまった。今にも消え入りそうな呼吸。今にも止まってしまいそうな心臓。触れれば折れる体躯。

——綺麗だった。

識織は後ろ手でゆっくりと入って来たドアを閉めると、斎歩が眠っているベッドのわきに置いてあるイスに腰かけた。

「イブ、ちゃん……」

はつきり言つて、何をしに来たのか、何がたくてここに来たのか、自分でも分かつてはいない。

なんて言えればいいのか、分からない。

二年も前からこうなることを予測できていながら、何もできないと悟っていたこの少女は、何もしなかった。

それが悪いことだとは、誰も言えない。

戦争と同じだ。誰もが起ると分かっているながらも、一国民の力で

はどうすることもできない。

そして、その未来を予見させるに至った最大の原因は——本多識織そのものだった。

だから、なんて言えばいいのかなんて、分からない。

室内には、ただ断続的に、心電計の機械音が無機質に響き渡るだけだ。まるで、自分の中身が空っぽになってしまったかのような錯覚を覚える。

空っぽ。伽藍の洞。

打てば、割れる。

「……………あ、う」

呻き声が、聞こえた。

識織は思わず椅子を倒して立ち上がってしまった。がらんがらんと、甲高い金属音が響くが、この際あまり気にしない。

斎歩の顔を覗き込むと、苦しそうに悶えながら顔を顰めていた。堅く閉じられていた瞼が、じわじわと動きながら、やがて血のように真っ赤な瞳が覗いた。

「……………イブちゃん」

「な、んで……………」

「え？」

擦れ切った声で、絞り出すような声で、識織と眼が合った瞬間、言った。

「なんで、ボクを助け、た……」

「ッ！？」

それは、恨み言の寝言なのかもしれない。しかし、幼い少女は言った。憎しみを確かに込めた、悪魔も逃げだすような擦れた声で。

「なんで、なんで、なんでなんでなんでなんでなんで——なんでッ！」

今にも死に耐えそうな呼吸をすることすらせず、死に向かうように喚き散らかす。

識織は、その小さな少女から発せられる言葉の一つ一つに、後退を強いられた。

そして、斎歩がこれほどまでに感情を露わにしたのは、初めてだった。冷静沈着の四字熟語がこれほどまでに似合う人間に識織はこれまで出会ったことはない。

だが、それはただの殻だった。

叩けば、割れる。

来るべき時に合わせて構築したそれは、その時が来た瞬間に砕け散った。

その時以降のことなんて、微塵も考えていなかったから。その時以降の時は、訪れることなんてないはずだったから。

「なんで、未来は、未来は——ボクは地面に叩きつけられて動けないところを喰われるはずだったのに、なんで、なんで変わった——ッ！？」

そのとき、心電図が異常な音を発した。それと同時に、斎歩が苦しみだす。

おそらく、興奮しすぎたのだろう。

だが、彼女はその留まることのない恨みをぶちまけ続ける。

「生きてたつてしようがない、殺してくれ、殺してくれッ!」

——動けなかった。

なにも、することができなかった。

首から上以外はほとんど動かすことのできない少女を前にして、
識の身体は完全に硬直していた。それがどうしてなのかは、分からなくなっていた。

そのとき、特殊部隊の突入のように乱暴に開かれたドアから、一人の女性が飛び込んできた。

焦げ茶色の髪を颯爽と舞わせて登場したその人物は——源終夢。

「誰だ、キサマ!」

「通りすがりの生徒会長よ」

彼女は、ゆつくりとした所作でその手を少女に向けた。

一瞬で、喚き散らかしていた斎歩が静かになり、浅い呼吸を繰り返し始めた。というか、寝ている。

「先輩……」

「この院長は私のお父様の知り合いだね。お父様につき添って来たわけだけど、どうやら正解だったみたいね?」

彼女は、硬直したままの識^し識^しに、いつもどおり不敵な笑みを向けた。

「ふうん。そんなことがあったのね」

「……軽い、ですね。まるで、他人事だ」

一旦病室から出た二人は、患者がぼつぼつといるロビーでソファに腰掛けて話していた。というより、識^し識^しは事の顛末を洗いざらい吐かされた。別に、飲みこんでおくつもりはほとんどなかったのだが。

「当たり前じゃない。他人事なもの」

血と肉と骨の地獄を話してなお、このふてぶてしさ。

勇ましい——というより、恐ろしい。

「それにしても、無様ね？ 不細工な上に無様じゃ、もう取り返しがつかないじゃない」

いつも通りの毒舌。いつもなら勢いよく解毒^{ドク}剤^{ザイ}もできるのだが、それをする気力さえ起らない。それどころか、その言葉の一つだけでも、十分な致死量に達していた。

「そうですね、不細工で無様です。その上、無粋なとしちまった……」

自殺しようとした少女は、他の人間と違って、脅されて死のうと

したわけではなく、自ら死を選んだのだ。

自殺することに、それだけを考えて二年の時を過ごしていた少女は——無粋な輩のせいで、無情にも生き長らえさせられた。

しかし、終夢はそこに追撃を入れるどころか、不思議そうな顔を
してこう言った。

「何を言っているの？ 私が無様だと言ったのは——今よ」

「え？」

「だから、あなたはなんでこんなところでウジウジしてるの？ ま
るでウジ虫みたいに、じめつばくて汚らわしい。あなたが一年くら
い通っていたひなどり園というところは、あなたにとって大切なと
ころで、それを壊されたわけでしょう？」

完膚なきまでに凄絶に。

壊された、消滅させられて、掻き消された。

血と肉と骨で、全ての思いを上書きされた。

だからそれは、全て自分の落ち度で——。

そこまで考えたとき、識織の顔面に平手——ではなく、握り拳が
飛んできた。

意表を突かれた識織は、為すすべなく鼻っ柱にその一撃を貰った。
大きく後ろに仰け反ってがら空きになったどてっ腹に、さらに拳が
めり込む。

「ほら、またウジウジ考えていたでしょう？ 一般人でも避けられ
る速さだったパンチに気付くことさえできなかった」

だとしても、それは最初の一撃だけで、二発目の腹への一撃は不
要だったはずだが、混乱している識織はそのことには気付かなかっ

た。しかし、その混乱は今起きたものではなく、先程のことが原因で起こったモノが今でも続いているのだ。

織織は鼻から滴り落ちてきた血を指先で拭いとりながら、ゆっくりと身体を元に戻す。

「なに、するんですか——痛いじゃないですか」

「それが？ イラついたんなら、殴りかかって来なさいよ。ウジウジ頭の中で考えるんじゃないで、行動に出してみなさいよ——それとも、そんな度胸もないのかしら？」

「……ないです」

「あつそ。だったら、あなたはいつまでそうしてるつもりなの？」

「……？」

彼女は、何が言いたいのだろうか？

顔を殴って、腹を殴って、暴言で心も殴って、何が言いたいのだろうか？

終夢は、口を開く。

「悔しくないのかって、言ってるのよ。全部奪われて壊されて殺されて、そのままにもせず、一人の女の子も守れないでウジウジだらだら、いつまで悩んでるのよ。行動しなさいよ。奪われたら奪い還しなさい。壊されたら壊しなさい。殺されたら殺しまくりなさい。あなたにはそれをする権利と義務がある」

「……だけど、俺はもうこれ以上このことに関われなと思うんですよ」

識織は、顔を伏せる。今の情けない、劣情で歪みに歪んだ顔をこの生徒会長に見せるわけにはいかなかった。

「これ以上、俺が関わったって、誰も幸せにならない。それどころか、イブちゃんを苦しめるだけだ」

「それがどうしたのよ」

「え？」

「いい？ 聞きなさい。耳が詰まっているのなら、耳を抉り取ってでも聞きなさい」

終夢は、俯いている識織の顔を両手で挟みこみ、強制的に自分の目と会わせる。

眼と目が、ぶつかり合う。

「別に、あの女の子のことは今はどうでもいいのよ。私は、あなたがどうするのかを聞いているのよ？ どうしたいのかを聞いているの」

「……どうしたいのかって、そんな」

あまりにも、あんまりすぎる。

それでは、齋歩のことなんか関係なくなってしまうではないか。そんな暴論、論じることすらできない。

「だから、俺はなにもしないって——」

「そうやって何もしないことが、それが一番なのでしょうね？ け

れど、それがどうしたのよ。なんで最高の選択をしようとするの？」

「なんでって、それは……」

斎歩をこれ以上苦しめないため、だ。

「最低の選択でもいいじゃない。自分がやりたいことが、誰も幸せにならないようなことだったとしても、それがどうしたのよ。そんなこと、知ったことではないわ」

視線がぶつかり合ったまま、終夢は瞬きもせずに、言い放つ。

「一緒に居たいなら、居ればいい。殺したいのなら、殺せばいい。」

——あの女の子に、生きていて欲しいのなら、生かせばいい」

「……だけど」

「ここまで言っで、まだ気付かない？　なら、いつまでもじつくりジトジト考えてなさい。ただ、時間は待ってくれないわよ」

終夢は識織の顔から手を放すと、ぱっと立ち上がって颯爽とどこかに立ち去ってしまった。

識織は、ただその後ろ姿を見つめることしかできなかった。

第十八話：殻（後書き）

あと何話で終わるかな。

後数話で終わるでしょう。

ウジウジ悩む主人公。ここからは、自分との闘いです。
最高の味方であり最低の味方でもある、自分との。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第十九話：終わる悪夢

一年もすれば、このアパートにも見慣れた。

オレンジ色の斜陽が差し込むその部屋で、識織はベッドに腰掛けてテレビを眺めていた。ただし、その内容はまったくもって頭に入っていないかった。今ならば、1+1も分らないだろう。

『k w h t m s げ b j ばお b x ば k k が j k d』

聞こえなかった。聞きたくなかった。

何もかも投げ捨てて、何もかもとを関係を断ちたかった。

今までもそれなりに大きな面倒事に巻き込まれてきて、いくつかの命が消えていくのを見たが、今回は別格過ぎる。

いくつもの人間が死んで、その唯一の生存者である少女にも、全てを拒絶された。

はつきり言つて、死にたい気分だった。

——まるで、悪い夢を見ているかのよう。

「俺が、悪いんだ……俺が、俺の所為なんだ……」

全部、本多識織の存在が招いたことだった。

今まで生きてきたことが、全て無為だったかのような気さえしてくる。

全てが始まったあの時から、今までが、今回のことの為の伏線だった。

ようするに、本多識織の人生はバッドエンドだったということか。頭が、割れそうだ。

いっそのこと、割れてしまえ。

自殺なんて、怖くてできない。こんな、死ぬべき状況になっても、

怖くて怖くて、できなかった。

できないなら、忘却すればいい。

そうすれば、いいのに——できるわけがなかった。

この一年、あのひなどり園のみんなにどれほど助けられてきたかと、そう思うだけで、指先が麻痺して、嫌な汗が噴き出してきて、身体ががちと震える。

「……ごめん、ごめん——ッ」

謝ることも不毛。

するべきことは、奪われている。

したいことには、楔を打っている。

前者は助けた少女に、後者は自分で。

奪われたなら奪い還せばいい。楔を打たれたのなら、抜けばいい。たったそれだけのことをするのも、なんだか、嫌だ。

朝起きて、机に向かって勉強をして、昼にはカップ麺を食べて勉強をして、夜にはカップ麺を食べて寝た。

翌日も、翌々日も、翌々々日も、そうした。

気がつけば——課題は、終わっていた。

そんなある日、久しぶりにスマホの着信音が響く。

通話先は——。

「……もしもし、アキラくんか？」

『……ああ、ホント、死んでるみたいだな声してんのな。俺ビックリ』

いつもどおりの声色の、クラスメイトAだった。

「どうしたんだよ、アキラくん」

『なあに悩んでんのよ、お前は？』

「……終夢さんか」

事情を知っているのは、斎歩本人か源終夢かの二人に分けられるし、その二人の内可能性があるのは源終夢のみだった。

『そーそ、急に電話がかかってくるもんだからびっくりしちゃったぜ。よもや、犯罪に手を染めてまで俺の電話番号を手に入れるとは、俺にぞっこんと見えるね』

「……なあ、アキラくん」

識織は、唸れた声で言う。

『なんだ、識織』

クラスメイトAは、答える。

「俺は、何に悩んでんだろうな？」

『……そうだな、当たり前前に悩んでんだろ？』

「当たり前、前？」

クラスメイトAは、いつものように軽い調子で進める。受話器越しでも、彼が得意げに語る姿が鮮明に思い浮かべられた。ただし、それも演技だということは、すぐに分かったが。

『そーそ、普通誰でも悩むことだよ。偏見を持って言えば、そんなのはただの独善なんだけどな』

「独善……」

『お前さ、何を信じてんだ？』

「何をつて……？」

それは、齋歩に言われたことが根底に来ているだろう。あの子が、何をされても幸せにならないと聞かされてしまったのだから、もう、なにをしていいはずもなくなつた。

『お前は、その女の子に言われたことに悩んでんだろ？ 今までだつて、お前の周りで人間が死んで来て、そのたびに行動を起こしてきたお前が悩むんだもんな。予想外デースってやつか？』

正鵠を射ていた。話だけで事情を理解するとは、中々に相談しがいのある奴だと、少しだけ見直した。

クラスメイトAは、続ける。

『お前、それ、本気で信じてんのか』

「……え？」

『その女の子が言ったこと、本気で本当のことだとか、思ってんじやねえだろうなっつってんだよ』

「……、でも」

あれが演技だとは思えないし、思わない。

『そりゃ、半分ぐらいは本気だったろうさ。俺も全部否定するほど馬鹿じゃねえよ』

だけどな、と続ける。

『半分は嘘だって言う可能性だって、あるんじゃないか？ その女の子が言ったことには』

「半分は、本気なんだぞ」

『半分は嘘かも知れねえな』

「そんな賭けに……」

『半分あれば、十分すぎる』

思わず閉口した。

たしかに、言われてみればそうだった。嘘についていると仮定したうえで予想だが。嘘についている理由は分からないが、についている可能性はある。

『やれよ。お前が主人公だ。相手のこと考えず、これまでいろんなことに首突っ込んできたじゃねえか。——じゃねえと、俺がやるぞ？』

一時の沈黙が、電話回線の間で流れる。

今日は雨が降っていて、夕日は全然射しこまないが、いつもなら

ば夕暮れ時だ。

「……なあ、アキラくん」

『なんだよ、ヒッキー』

「……俺、なにしてんだろっな？」

『なんもしてねえ』

「——だな」

識織は、立ちあがってテラスに繋がる窓から空を見上げた。灰色の空には分厚い雲が幾重にも重なり合って、夕暮れ空のオレンジ色は見えない。

けど。

ふっと、隙間から夕日が射しこむ。

一条だけ。ほんの一条だけだ。

『なんだか、クソ昔の漫画みてえなことしたな、俺。落ち込んでるダチを勇気づけるとか』

電話の向こうで快活に笑う。そう言えば、古臭い。

だが、それも良いだろう。たまには、黴の生えた王道を歩いてみるのも。

「だな。まあ、アキラくんにはそれがお似合いだよ」

識織は、一旦顔を伏せていつものような軽い調子でそう言う。

『あーあー、じゃあ切るぞ。それと』

「なんだよ？」

ほんの少しの沈黙。しかし、それは今までと違って重苦しいものではなかった。

クラスメイトAは、軽い調子で笑うように。

『俺がやらなくて、いいんだな？』

識織は、ちよつとだけ間を置いてから、ゆつくりと顔を上げた。

——一条の夕日は、それでも柔らかく、識織の身体を包み込んでいた。

「——ああ」

『かつ。じゃあな、識織』

「ありがとな、アキラくん」

『てめ、最後ぐらいは本名』

皆まで言わせなかった。

識織は、顔にぶつかる夕日に目を細めながら——うつすらと笑った。

——彼と彼女に、万感の意を込めて、

「——ありがとう」

識織はベッドにスマートフォンを投げ捨て、玄関に向かう。

——行く先など、決まっている。

悪い夢は、終わった。

今度は、良い夢でも、視させてあげよう。

第十九話：終わる悪夢（後書き）

走り抜けましょう。

オリ小説完結に向けて。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二十話：走ってぶつかる

かなりの雨だったが、夜になった途端に止んでしまった。
それもいいだろう。

そう言えばだが、あの錯乱状態の時、斎歩は『未来が変わった』
と言った。おそらく、『真理の明眼』を開眼している状態である事
態に関わったため、『先見の晴眼』が視せた『確定された未来』に
干渉したのだろうか。

それとも——人間には、未来を変える力があるとも言えるのか。

あの少女が、消えて無くなった未来をどう生きていくかは、もは
やあの少女次第で、組織が関係していいものではないだろうが——
少しは、手助けをしても良いと思う。

どれもこれも、全てを終わらせてからだ。

組織は情報収集として、とにかく走りまわった。それもそのはず
だ。敵のアジトの場所なんて分かっていたら、速攻でケリをつけら
れるのだから。

だからまず、情報が必要だった。

どんな些細なことでも——『真理の明眼』は見逃さない。

走って走って走って走って、走って走って走って、走って走って、
走って——。

——見つける。
情報を。

たった一欠片の、紙切れ。

「……辿れるかな？」

辿ってみせる。

そこから得られる些細な情報、物体に宿る記憶のようなもの。それが、特殊な魔力などを宿していたものなら、尚更辿り易い。

識織は、その紙切れを見つめ、くしゃっと握り潰す。

「……………病院か」

僅かに残っていた、薬品の微粒子。

自分も使っていたから、よく分かる。

非ステロイド性抗炎症薬。

だが、ここらへんで大病院と言えば、識織が入院していたところぐらい——ではあるが、同じ場所に入院していたのなら、それはもう、すぐさま顔を合わせることになるだろうし、八重という男が入院するとも思えなかった。

「だったら」

廃病院があった。

——たしか、医療ミスで一気に破綻してしまった廃病院が、あった。

識織が、斎歩が、入院していて、入院している病院の裏手に。

おそらく、非ステロイド性抗炎症薬も、識織が入院していた病院からくすねたものだろう。

「……お前は手を出すなよ」

「……承知しました」

識織は、気配を殺して背後に立っていた狐面の少女に対して命令する。

いや、嘆願か。

そしてまた、狐面の少女の気配は消え去る。

——一人で、終わらせる。

識織は、そして、また走りだす。

黒く黴で、夕方に降った春雨のせいによりじめじめとしている廃病院の一階のロビーの部分で一人の男が佇んでいる。

「くそ、所在がつかめない」

『真理の明眼』も、『先見の晴眼』も、どこに居るのかつかめない。よもや、あそこに本多識織が関わってくるとは思っていなかった八重。東京という区切りに拘ったのが間違いだったか、と内心後悔する。

だが——彼はこの場を離れられない。

この場を離れるには、あの教団の力を借りねばならない。

それは、憚られる。

あの、なぜ『源点』を求めているのか定かでない、気色の悪い組織に――。

だが、自分もその齒車の一部だということ。それは、忘れてはならないことなのだろう。だが、それでいい。全体を回すのは、齒車であるのだから。

それよりも、本多識織だ。いや、『先見の晴眼』でもいい。

――見つけなければならぬ。

どんな犠牲を払ってでも、どれだけ悪だと言われようとも、どれだけ憎まれようとも、全世界の生物から蔑まれても、護るべき存在からも疎まれても――変わらない。

世には――十を守るために一を殺し、百を守るために十を殺し、千を守るために百を殺し、万を守るために千を殺す者もいるらしい。

ならば――、

「――一を守るために、全てを殺そう」

――こつ、こつ。

古ぼけたタイルの床に、足音が響く。

――こつ、こつ。

八重は、懷から狼に折った折り紙を三つ取りだす。

――こつ、こつ……こつ。

「なら俺は、零のために、一を殺そう」

砕け散った側面の窓から、幾筋もの月明かりが院内を照らす。

二つの影を伸ばす存在。

本来ならば、『先見の晴眼』による『確定された未来』の中にならば、絶対にありえなかった戦い。

「本多識織イイイイイイイイイイイイイイイイイッ!」

「……終わらせるぞ、全部」

——因果の終結。

——物語の帰結。

——それらは全て、人の手によって行われる。

生き残るためには——ただ、勝つ。

この日、超能力者と魔術師による、因果を断ち切るための戦いが始まる。

——ただ、運命を変えるために。

第二十話：走ってぶつかる（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二一話：識らねえよ

ふっと、全身から力を抜いて、倒れこむようにして自然な形で前傾姿勢になる識織に対して、八重は懷に右手を突っ込み黒い折り紙を取り出す。

しかし、識織の動作は流れるようだった。

今までのように鋭角的な、所謂ロケットスタートというより——例えるなら、風。地面に吹き下ろして四方に吹き渡る風のように、識織は地面へと接触する直前に、そのまま流れるように前へと突貫した。

たんっ。たんっ。たんっ。

十メートルの距離を、助走なしの三步で詰めた。

「なッ!？」

驚く八重に対して識織は——驚くほど爽やかな笑顔で、何も握っていない右拳を握りしめながら、こう言った。

「——こっちゃん、驚くほどキレてんだよ、クソ野郎が」

握りしめ、懷に潜り込んだ識織は、溜めに溜めた拳を、そのまま八重継真の顔面に炸裂させた。

「ぶぐアッ!？」

一瞬後ろに仰け反る八重だったが、如何せん体格の違いか、後ろに跳ばうとした体を制動し識織の顔面を右手で掴みとった。

「……奇遇だな。私も思い通りにならなくて、苛立っていたところだ」

「て、め……これ、義手」

「魔装のな。雷神トールの手袋を模した義手だ。剛力が手に入れられる」

冷静を装っていた識織だったが、頭に血が上っていたようだ。たしかに、識織の『真理の明眼』には八重の右手は解析が重要そうに見えていた。

「トベ!」

人形のようにぶんと振りかぶられた識織はそのまま壁へと投げつけられる。空気の層に干渉を行い、威力を減衰させる暇もなく識織の身体はコンクリートの壁に叩きつけられ、罅を入れた。

肺の中の空気が外に排出され、「あ、アあ……」という呻き声が漏れた。

「お前の付き人に手痛くやられたのでな。接近戦について、対策を打たないはずがないだろう」

「く、そ……あいつ、手首切り落とすとか……」

とにかく、これで接近すれば勝ち、という方程式は崩れた。

一度目で決着をつけなかったのにかなり後悔するが、もうそれは過ぎたことだ。識織は喉の奥からせり上がって来た紅い液体に咳払いをしながら、口元をぬぐい立ち上がる。

「ちょっと余裕を見せた結果が、コレだよ！」

識織は腰のベルトに差していたナイフを抜き放ち、痛む身体を押し切ってもう一度突撃した。

接近戦であちらにも勝機が見えたと言っても、やはり戦闘経験の差というものがそこには立ちふさがる。それに、識織には接近戦以外の選択肢は無い。

だが、そこはあちらとて分かっている。急増のドーピングなんかに頼ったりはしない。

通常通りの最大戦力を以って、識織を潰しにくるだろう。

「……頭……!」

だが、現れた存在は、今までとは全く違うもの。

鳥だ。

嘴が鋭く尖った黒い鳥。

黒い、鶴だった。

三羽の黒鶴はアクロバットな飛行を披露しながら、黒狼とは比べ物にならない速度で識織に殺到した。

一瞬の驚愕。

だが、その一瞬が痛手を負うきっかけになることになることもある。

避けるという動作を取るには、その一瞬が大事だった。

識織は舌打ちを打つ暇もなく黒鶴の迎撃に移る。

一羽目の突撃を伏せることによって避け、身体を捻り黒鶴の喉めにかけてナイフを振るった。

「だらアー!!」

終わる、はずだった。

いつもなら、という言葉を使うのは、なんだか式神を切り裂くのが日常的になっていくように聞こえるがそうではないのは言うまでもないことだろう。

生理的嫌悪を誘う白いモヤは確かに切断面から噴き出た。だが、身体は消え去らなかった。どころか——胴体と切り離された長い首が、鋭い嘴とともに襲いかかって来た。

「なッ!？」

「生物ではないのだよ、式神は」

ようするに、耐久値なんて自由自在ということか。

識織はその事実唇を噛みしめながら、しかしそれぐらいでは屈しなかった。

蛇のように体をよじらせ襲ってきた黒鶴の首を真つ二つに切り裂き、左足を軸にして回し蹴りで吹き飛ばした。

だが、そこに二羽同時の突撃が襲いかかった。

識織は冷静に息を吐きだし、左側から襲いかかって来た黒鶴の嘴を掴みとり、右側から襲いかかって来た黒鶴の嘴をナイフの刃を滑らせるようにして避ける。

しかし、生物ではないと言っても、それはそれだけのことだ。黒狼のように、自分で考え状況に応じて動く。

黒鶴二羽は空中で高速旋回するために大きく翼を広げる。そこで、一瞬だけ速度が零になる。

識織はその瞬間を狙った。速度が零になったその身体、狙うのは片翼。翼を？がれた鳥は、空を飛べない。

一瞬の隙を突くには、一瞬で決めるしかない。背を見せている黒鶴に近づき、翼の根元を切り裂いた。地に墮ち悶えるのを確認せずに、もう一羽の方に身体を翻す。

どすつ、と。左肩に、黒鶴の鋭い嘴が突き立った。

「ぐう……」

横に吹き飛ぶのを感じながら、識織の足は地面から離れた。識織は突き立っていた嘴の主の首を縦に引き裂き、引き抜いた。どろどろとした粘性のある紅い液体が服に黒い染みを作った。

空中で体勢を変えるよりも先に、更にもう一羽、識織の顔面を狙って突撃をかけてきた。

顔の前に来た嘴をナイフの柄で叩き割り、逆手に持ち替えて翼と

頭部を引き裂いた。

しかし、そのことでさらに後ろ側に力が加わり、また壁へと叩きつけられた。

そこに、さらに三羽。

肺の中に酸素を求める間もなく、顔を顰めたまま身体を横に転がした。先程まで彼がいた場所には、鋭い嘴がいくつも突き立てられたコンクリート製の壁があった。

識織はそこで息を吸い込み、突き刺さっている黒鶴の身体を切り刻んだ。

「どうした、本多識織。その程度か」

「どの程度だって、あんたぶつ飛ばせばいんだよ!!」

「そうか。ならば、その程度だった自分の力を恨みながら——死ね」

よく通る声。死の宣告だった。

八重は肩で息をし始めた識織に対し、追い打ちをかける。懷に手をつ込み、黒い折り紙で作られた鶴を宙に放った。

それは瞬く間に変質し、鶴の姿へと変えていく。

「貫け」

甲高い鳴き声を上げた黒鶴は、その大きな翼を羽ばたかせ、一気に加速する。

その両翼が空を切る音が近づいてくるのを感じる識織。

「なにが、あんたをここまでやらせんだよ……」

低空飛行で真正面から来た黒鶴の嘴を踏み砕き、アクロバットな飛行でトリッキーに攻めてきた二羽の攻撃を避ける。ここが屋内と
いうのはほとんど気にならないほど高い天井まで舞いあがった二羽
は、そこから急降下し、識織の脳天を狙う。

だが、その攻撃は、識織の頬を掠めるだけだった。

識織は、なにもしていない。

「なんで、あんたはここまでするんだよ」

「……アルビノ、というのを知っているか？」

よく通る声は、識織に衝撃をもたらした。だが、そんなことは表面に出さず、肩で息をしながら、「ああ」と答える。

八重継真は、何を言おうとしている？

「私の娘は、ソレだ。直射日光を三十秒でも浴びれば、皮膚が真っ赤に焼け爛れるレベルのな」

識織の頬を掠めた二羽の黒鶴は、八重の両脇へと舞い降りた。

彼は、識織を睨みつける。

「彼女は、ソレで母親に捨てられた。『気持ちが悪い』と、ただ一言を残してな」

——重なる。

だが、それは重ねることのできない現実だった。

八重の娘と、彼女は、違つ。重なり用の無い、別個の存在なのだから。

「お前に、彼女の気持ちが分かるか。成長し、太陽も浴びれぬ彼女の気持ち、分かるのか！？ 太陽を求めて、見詰めた先に、彼女は光を失つた――」

――そんな彼女の気持ちが、分かるのか！！

答えは考えるまでも無く、分かりきつたことだつた。

「識らねえよ」

「……………なに？」

「もう一度言つてやる――識らねえよ」

なにが彼をここまで駆り立てているのかは、十分に分かつた。娘を守りたい、と思つてゐるのだらう。娘を助けたい。と思つてゐるのだらう。

それが分かつていながら、識織は、呆然となつてゐる八重に向けて、月明かりに鈍色に輝くナイフを向ける。

「そんでもつて、あんたは間違つてる」

「――人が幸せを求めるのに、犠牲は付き物だ」

低い声で唸るように反論した八重。それから目を逸らし、閉じた。

三秒。

何が違つて、何が悪くて、何を思つたのか。

次に瞼を開け、その鋭く紅い眼光を八重に飛ばしながら――言つた。

「そんなもんは、幸せなんかじゃない」

第二一話：識らねえよ（後書き）

ああ、そう言えばこの作品のコンセプト、言ってませんでした。

——アツイ主人公……！！

はい、嘘ですごめんなさい焼き土下座しますですはい。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0981z/>

真理と俺。

2012年1月8日00時53分発行